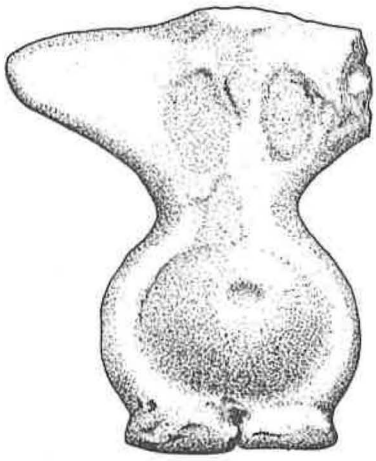
東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 22

馬場川遺跡・上六万寺遺跡
山畑66号墳調査報告

昭和55年度



昭和56年3月

東大阪市教育委員会

例　　言

1　本書は、東大阪市教育委員会が昭和55年度に国庫ならびに府費の補助を受け、発掘調査を実施した馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畑66号墳の調査報告書である。

2　馬場川遺跡の調査は、宅地造成・分譲住宅建設に先立って、昭和55年10月23日～11月５日までの間に実施したもので、東大阪市教育委員会文化財課主任原田修が担当し、同課勝田邦夫が補助した。調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課、技師松岡良憲氏の協力を受けた。出土遺物の整理・原稿執筆については、大野　薫（大阪府教育委員会文化財保護課技師）・水野昌光両氏の格別なご協力を受けた。

3　上六万寺遺跡は、これまで幸殿遺跡と呼んでいた遺跡であり、今回の調査は、共同住宅建設に先立ち、昭和55年８月１日～８月24日までの間に実施したもので、文化財課勝田邦夫が担当した。以後、遺跡名を変更するものである。

4　山畑66号墳の調査は、採石工事に伴って昭和55年８月１日～８月13日までの間に実施したもので、文化財課芋本隆裕が担当した。

5　本書の執筆は、馬場川遺跡の遺物をのぞいて、各々の担当者が行った。また、上六万寺遺跡・山畑66号墳の遺物写真については、特に落合信生氏の手をわずらわせた。

6　調査の実施にあたっては、次の方々の格別なるご配慮・ご協力を得た。ここに明記しお礼申し上げる次第である。

日昭興産株式会社・株式会社富士住建・池田建築設計事務所（馬場川遺跡）
村木良己氏・西川修身建築設計事務所（上六万寺遺跡）
出口　弘氏（山畑66号墳）

本 文 目 次

第１章　調査の経過……1
第２章　馬場川遺跡の調査……3
第３章　上六万寺遺跡の調査……14
第４章　山畑66号墳の調査……27

挿 図 目 次

第１図　周辺遺跡分布図……1
第２図　馬場川遺跡調査地点図……3
第３図　昭和55年度調査区域図……4
第４図　調査区南北壁断面図……5
第５図　検出遺構平面図……6
第６図　弥生土器……8
第７図　凹石実測図……11
第８図　上六万寺遺跡調査対象地位置図……14
第９図　調査地点位置図……15
第10図　西壁・南壁の層位……16
第11図　住居跡平面実測図……17
第12図　弥生土器実測図　壷……18
第13図　弥生土器実測図　鉢……19
第14図　弥生土器実測図　高杯……20
第15図　弥生土器実測図　甕用蓋・器台・手焙形土器……21
第16図　弥生土器実測図　甕……23
第17図　弥生土器実測図　底部……24
第18図　歴史時代の土師器・須恵器実測図……25
第19図　山畑古墳群分布図（1/5000）……27
第20図　周辺測量図（1/900）……27
第21図　山畑66号墳石室実測図（1/40）……29
第22図　石室内出土遺物……30

図 版 目 次

図版１　調査遺跡周辺航空写真（昭和30年後半）

図版２　馬場川遺跡縄文晩期遺構（調査区中央部遺構〈Ｉ－３～４地区　東より〉・検出遺構全景〈Ｋ－３地区　西端より〉）

図版３　馬場川遺跡縄文晩期遺構（調査区東端Ｈ－４地区の遺構〈北より〉・西端Ｋ－３地区の竪穴式住居跡）

図版４　馬場川遺跡縄文土器出土状況（Ｉ－３地区土器出土状況・Ｊ－３地区東端土器出土状況）

図版５　馬場川遺跡縄文晩期遺物・遺構（シカの下顎骨検出状況〈Ｊ－４地区〉・土壙検出状況）

図版６　馬場川遺跡弥生時代井戸状遺構

図版７　馬場川遺跡縄文土器

図版８　馬場川遺跡縄文土器・石器・石核

図版９　馬場川遺跡縄文時代石器

図版10　馬場川遺跡縄文土器１（実測図）

図版11　馬場川遺跡縄文土器２（　〃　）

図版12　馬場川遺跡縄文土器３（　〃　）

図版13　馬場川遺跡縄文土器４（　〃　）

図版14　馬場川遺跡石器１（実測図）

図版15　馬場川遺跡石器２（　〃　）

図版16　馬場川遺跡石器３（　〃　）

図版17　馬場川遺跡石器４（　〃　）

図版18　馬場川遺跡石器５（　〃　）

図版19　上六万寺遺跡遺構・遺物（中世の溝・弥生土器出土状態）

図版20　上六万寺遺跡遺構・遺物（住居跡・住居跡内遺物出土状態・西側断面）

図版21　上六万寺遺跡遺物１（弥生土器壺・鉢）

図版22　上六万寺遺跡遺物２（弥生土器鉢・高杯・器台・甕用蓋・土師器杯蓋）

図版23　上六万寺遺跡遺物３（弥生土器甕）

図版24　上六万寺遺跡遺物４（弥生土器壺・甕・高杯）

図版25　上六万寺遺跡遺物５（弥生土器鉢・手焙形土器・歴史時代の土師器・須恵器）

図版26　山畑66号墳石室（古墳全景・石室全景・石室内床面の状況）

図版27　山畑66号墳遺物

第１章　調　査　の　経　過

１　馬場川遺跡　昭和55年6月末、横小路町４丁目417番地の工場跡地において、宅地造成・分譲住宅建設の届出があり、試掘調査及び協議を経て、約500㎡の区域について発掘調査を実施した。今回の調査地点は、昭和44年度に工場建設に伴って敷地の一部（約800㎡）について緊急の調査を実施した所で、当時の調査では、周辺部が縄文時代後期末～晩期前半にかけた頃の集落中心部に近い状況を示すかのように、おびただしい晩期土器（滋賀里式）・石器・土製品などの遺物が石組炉跡・埋め甕・素掘り炉跡・住居跡などの遺構に伴って出土した地点のすぐ南側に接する区域にあたる。このため、敷地全体（約4000㎡）について試掘を行った上で、支障の多い区域について過年度調査を補足する形で発掘調査を実施した。今回の調査は、馬場川遺跡（中期末～晩期）の中心部であるが、工場建設によりその跡

第1図　周辺遺跡分布図

地が相当撹乱を受けていた割には、撹乱層直下には削平をまぬがれて多量の晩期土器・石器等を含む遺物包含層が10～20cmの厚さで遺存している状況であったので、10月23日～11月５日まで間、調査を行った。調査の結果は、第２章で記す通りであるが、縄文時代晩期のピット群・焼粘土遺構・住居跡に伴って、各種粗製・精製土器、土製品・石器・玉類等を検出し、また全ぱんにイノシン・シカの骨が相当出土し、作業場周辺の状況を示していた。

2　上六万寺遺跡　昭和55年７月、本遺跡の南端近くにあたる上六万寺町1412番地－１の土地について、土地売買の上、共同住宅を建設したい旨の届出があった。上六万寺遺跡については、これまでの調査で、弥生時代後期の良好な土器資料が得られてはいるものの、遺跡の範囲あるいは性格についてあまり把握できていなかったこともあり、７月22日、約600㎡を測る敷地について２ケ所の試掘調査を行った。

敷地は、工場跡地であったため、相当撹乱を受け、遺物包含層も一部破壊された状況であったが、試掘の結果、谷筋（長門川）に近い本調査地点にも地表下約60cmの所に、大型弥生土器片を豊富に含む遺物包含層を検出した。このため、協議を経て建物の建設予定部約150㎡について８月１日～８月24日までの間、発掘調査を実施した。

調査した結果、中世の溝、弥生時代後期の竪穴住居跡を検出した。弥生後期の住居跡は、東大阪市内では８例目であり、上部が削平されていて遺存状態が悪かったが集落や当時の社会を考える上での良好な資料となった。

3　山畑66号墳　昭和55年４月、生駒山麓に位置する山畑古墳群内にあたる上四条町2033番地の一画で行われていた採石作業中、石室の一部らしいものが発見された。このため、土地所有者に一時工事の中止と調査の実施について協力を求め、８月１日～13日にかけて発掘調査を実施した。

この結果、遺存状況はよくなかったが、周辺に分布する横穴式石室をもつもので、埋葬当時の状況がかろうじて残されていたことから、山畑古墳群の最終末期に築造された古墳の１つであることが知られた。

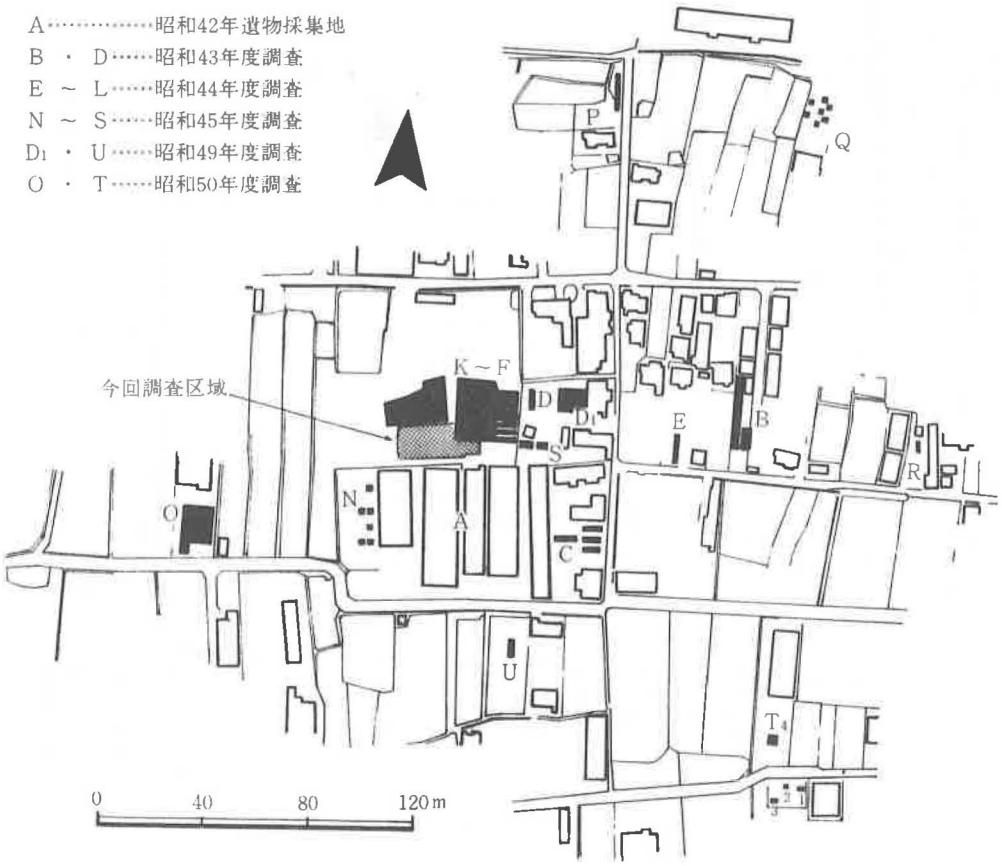
第２章　馬場川遺跡の調査

１　遺跡の概要

馬場川遺跡は、縄文時代中期末～晩期に続き、以後弥生時代後期～古墳時代の中葉にかけて生活が行われた集落遺跡である。遺跡は、畿内にとどまらず西日本でも著名な縄文時代集落跡の１つであり、一方では弥生時代後期のまとまった土器群が知られる遺跡として著名である。

馬場川遺跡は、縄文時代においては、当時山麓までせまっていたと見られる河内湾～潟にそって連なる縄文時代後半期を中心とする集落跡の１つであるが、本遺跡の場合、他の遺跡群と異なり、主として後期末～晩期前半を集落の盛期としている。

遺跡は、東大阪市の東南端近く、生駒山地に刻まれた横小路谷（箕後川）の谷口に形成された扇状地の末端に近い標高約15ｍ～25ｍの所に立地している。その範囲は、これまでの調査により、東西約300ｍ、南北250ｍにも及び、西半近くに中期末～後期末（馬場川Ｏ式・中津式並行・堀之内Ⅱ式並行・宮滝式）の良好な包含層があり、中心部～東端近くまで晩期の滋賀里式

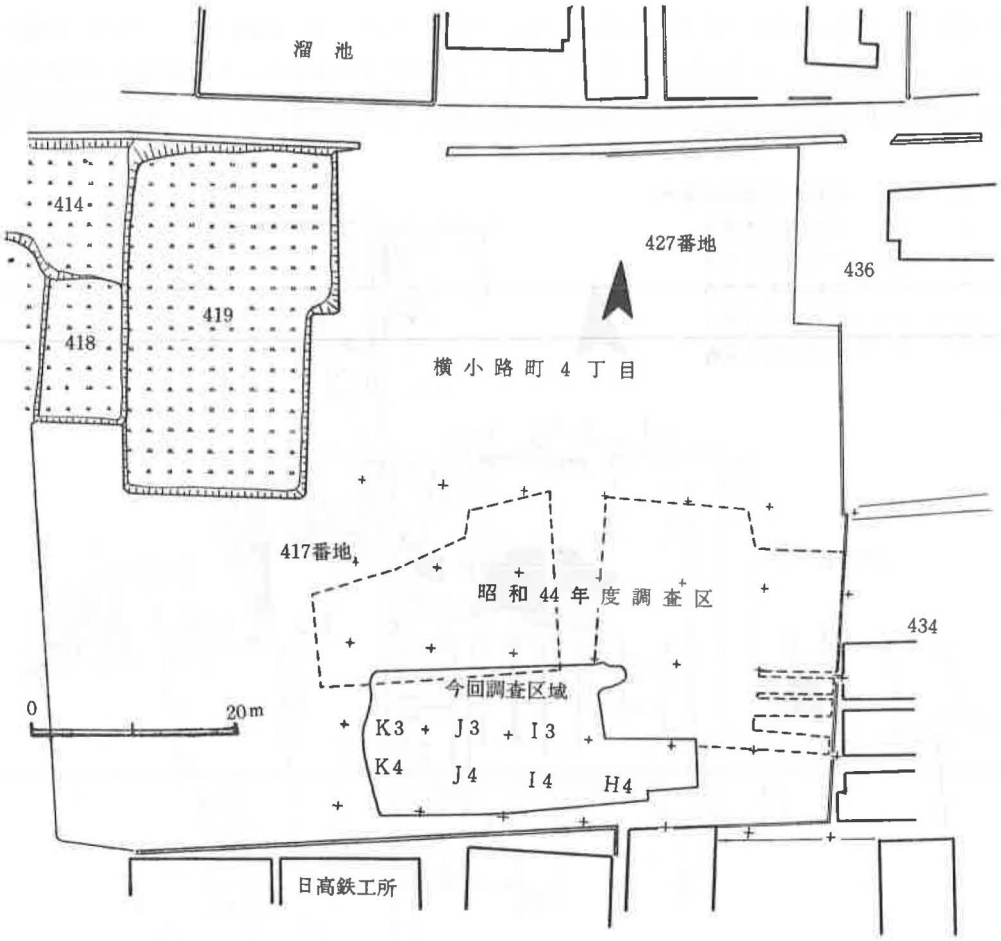


第２図　馬場川遺跡調査地点図

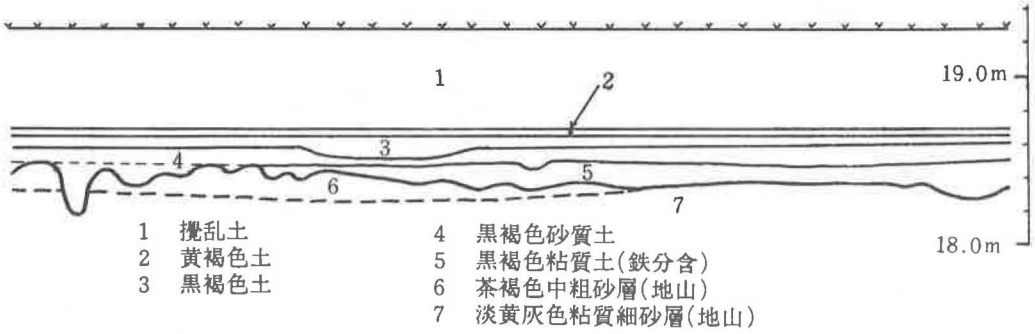
を中心（大洞式・安行Ⅲａ式並行含）とした多量の土器を含む包含層と遺構が広がっている。また、遺跡各所には、のちの弥生時代後期～古墳時代の遺構・遺物が散在している。

この中で縄文時代晩期の集落の中心は、今回の調査区域を含む周辺部で、昭和44年に行った北側敷地の調査（Ｆ～Ｌ地点）では、その東半部に多量の深鉢・浅鉢・注口土器の他各種の土偶・土製勾玉・硬玉製勾玉・石刀・石棒・磨石・石皿などの多量の遺物群が石組炉跡・埋め甕・住居跡に伴って出土した。昭和45年に行った東側敷地（Ｓ地点）の調査でも住居跡と床面を穿ってつくられた頭骨を残す土壙墓を検出し、集落の中心部であった状況をしめしていた。

今回の調査は、その南に接する区域で、昭和44年の調査では検出し得なかった多くのピット等を検出した。



第３図　昭和55年度調査区域図



第4図　調査区南北壁断面図

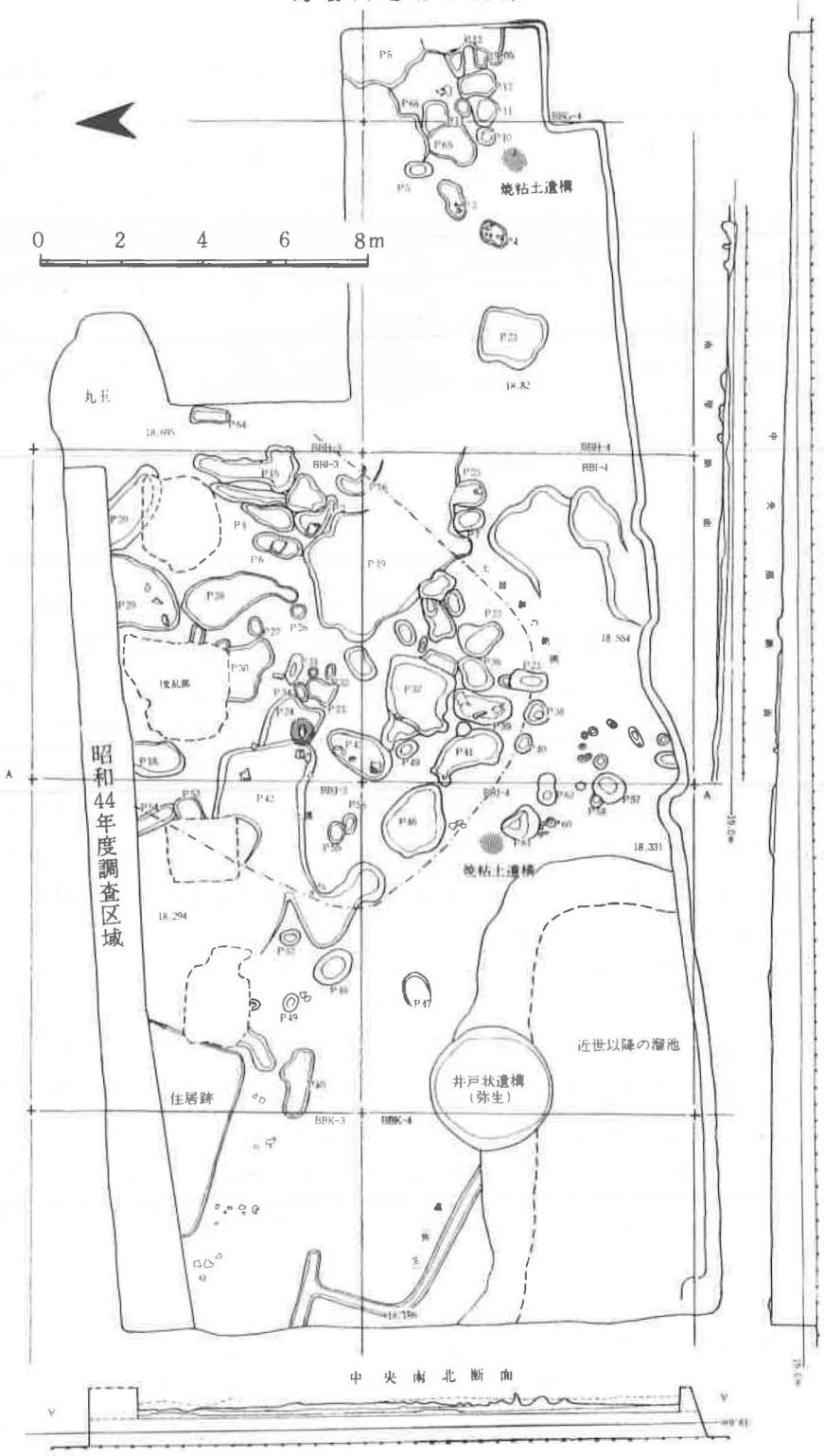
2　層序

今回の調査地は、工場跡地であったため、耕土及び第2層黄褐色土の大半は攪乱削平を受けていたが、この層直下には調査区西半部にかけて第3層黒褐色土が西に向って堆積し、弥生時代後期の土器を含んでいた。この層は、下部第4層の流失2次堆積層である。第4層黒褐色砂質土は、調査区中央付近を中心に多量の晩期縄文土器・石器を含み（厚さ10～15cm）、この層での土器群は大型破片を含んで、廃棄された状態に近かった。第5層黒褐色粘質土は、調査区北半で地山となる第7層淡黄灰色粘質細砂層が時期を少し遅れて堆積した（後期末）第6層茶褐色中粗砂層と共に地山となるため、北半ではやや粘質土、南半では第4層に近い層で、共に地山上で検出したピット群を埋めるように堆積している。調査区中央で、地山面標高約18.4mを測り、東端より西端は、－75cm傾斜している。

3　遺構

今回の調査によって、弥生時代の遺構として後期の土壙1と井戸状遺構1を検出した。井戸状遺構は、昭和49年のU地点で検出された例に近く、調査区西端で第4・5層を掘り込み、第6層の粗砂層（湧水層）に達するもので、直経約3.0m、深さ1.2mを測る。断面は、U字形を呈し、細い溝が西へ折れまがり続いていたものとみられる。遺構の南半は、近世以降の溜池築造により斜めに切断を受けている。遺構上層及び周辺部から後期土器群を検出した（第6図)。

縄文時代の遺構として、調査区全般にわたり、第6層を掘り込んだピット多数を検出した。これらは、調査区中央に集中し、多数の晩期土器片が集中した範囲に対応するもので、これらは共に東北方からこの調査区へ続いている状態を示している。東端ピット群の西端近くには、土器の胎土と同じ質の粘土を敷き焼成を受けた直経約70cmの焼粘土遺構がやや盛り上った状態にあり、中央ピット群西南端にも比較的のこりのよい同様の設備があった。共に土器あるいは


0 2 4 6 8m
焼粘土遺構
丸太
昭和44年度調査区域
焼粘土遺構
近世以降の溜池
井戸状遺構
（弥生）
住居跡
中央南北断面

第5図　検出遺構平面図

食肉等を焼くためのものであったとみられる。これらは北方縄手遺跡で後期前半の遺構として数例検出している。ピット群は、大小さまざまで不整形であるが、深さ10～20cmのものが多く、とくに中央ピット群南端のＰ２・Ｐ６には、上面がやや磨滅した作業台とみられる大型の石が据えられＰ19周辺にはサヌカイト剝片が顕著であった。また、中央部～西南部ピットその周辺部にかけて、イノシン・シカの下顎骨を中心とした骨が散乱していた。また、土器群の広がりの中で、石鏃・剝片石器・石棒片・石刀片・打製板状石器のほか土偶などの遺物が多く含まれていた。さらに、中央部南端で、深さ約10cmの小ピットが径１～1.4ｍのダ円形に検出した。西端部北側に南辺4.6ｍ、深さ約５～10cmの竪穴式住居跡の一部とみられる遺構を検出している。内部から石棒片を検出した。

遺構の状況及び第４層・５層ともに晩期前半の土器を含んでいることと合せて二時期以上のピットが重複しているものと見られるが、中央付近のものは、大半が古い段階のものとみられ集落内の一種の作業場ないしは炊事場的な場所であったとみられる。　（原　田　修）

4　遺　物

1.　土　器

今回の調査で出土した土器類はコンテナ約100箱を数える。その内訳は、縄文土器約70％、弥生土器約30％で、その他の土器はコンテナ１・２箱にすぎない。土器の整理は現在も進行中であり、いまだ報告しうる段階ではないが、一部についてとりあえずその概要を述べておきたい。（図版10～13、第６図）

(1)　弥生土器

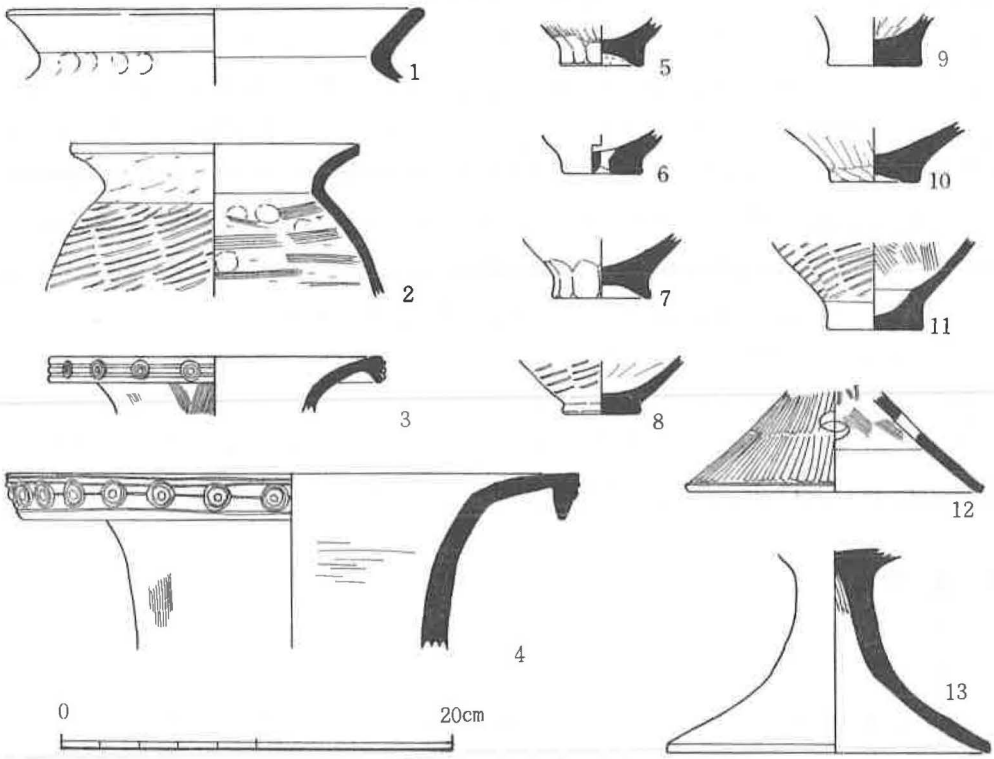
弥生土器については、調査区西端の井戸状遺構上部及び周辺より出土したもので、今回報告できる個体数がわずかであるため分類等はせず、個々の特徴を述べることで報告にかえたい。（第６図）

（１・２）は「く」の字形に屈曲する口縁部を持つカメで、（１）は頸部外面にユビオサエがみられ、口縁部内外面ともヨコナデを施す。（２）は体部に右上りのややあらいタタキがあり、口縁部外面にもヨコナデによって消えきらなかったタタキの痕跡が認められる。また体部内面はユビオサエとハケメがみられる。

（３・４）はツボの口縁部で、大きく外反し横にのびる口縁部端面を下にのばしてその外面に沈線をめぐらし、さらに竹管による刺突のある円形浮文をはりつけている。

（５～11）は底部で、タタキのみられるもの（８・11）、ミガキで仕上げるもの（５・10）、ユビオサエのあるもの（７）などがある。また（５・７・10）は凹底、（６・８・９・11）は平底となっている。（６）はいわゆる「こしき」で底部中央に焼成前の穿孔がある。

（12・13）は高杯の脚部で、縦方向のていねいなヘラミガキを施すもの(12)は円形四方透し



第6図 弥 生 土 器

をもつ。(13)は内面にしぼりめがみられる。

(2) 縄文土器

縄文土器は晩期のものが大部分を占め、それ以外には後期の土器が若干みられる程度である。とりあえず器形によって分類したが、将来、整理が進んだ段階で、分類も含めて再度報告する機会を持ちたい。

縄文土器には深鉢・甕・浅鉢・鉢・椀等がある。(図版7・8、10〜13)

A 深鉢

Ⅰ類(35・36)外反する波状口縁を有する土器で、ヘラ状工具などによる文様を持つもの。(35)は波頂部から口縁部に平行に2本の沈線をいれ、(36)にはやや大きな円形の刺突がみられる。

Ⅱ類(38・40)外反する口縁部と内弯する体部の接合に段をつくるもの。口縁部外面はナデで仕上げ、体部外面には二枚貝による調整のみられるもの(38)、ナデのみられるもの(40)がある。

Ⅲ類(7・10・43〜46) 体部と口縁部との区別のないもの。口頸部はほぼ直立する。外面

は巻貝で調整するもの（44・45）、二枚貝で調整するもの（43）、ナデで仕上げるもの（46）がある。（7）は小さな突起を口縁部上の四分点に配し、ケズリのあとナデで仕上げる。（10）は丸底の底部からごく弱く外反気味に上にのびる体部・口縁部をもつ。外面はナデを施し、内面にはユビオサエがみられる。

B　壺

Ⅰ類（29・32・41）　体部からなめらかに外反する口縁部をもつもの。外面に二枚貝調整を施すもの（29）、条痕のあとナデるもの（32）、ナデのもの（41）がみられる。

Ⅱ類（6）　上端部がすぼみ気味になる体部から折れ曲がるように外反する口縁部をもつ。波状口縁をなし波頂部は3ケ所あって、波頂部上端中央が凹む。口縁部は内外面ともナデ、体部外面は上から下へのケズリがみられる。

Ⅲ類（1～3・31・33・42）　長胴の体部からゆるやかに屈曲して外反する口縁部をもち、口縁部径が肩部径と同等か大きいもの。口縁部を横方向に二枚貝調整するもの（1～3・33）が多いが、ナデるもの（31・42）もある。体部は横もしくは斜方向の二枚貝調整を施すもの（1・31）、原体不明のケズリ（3）、などがみられる。

Ⅳ類（4，5・30）　胴のはる体部から屈曲して外反する口縁部をもつもの。口縁部は短く、体部は径が大きく高さが比較的小さい。体部外面はナデで仕上げるもの（4・5）、条痕のみられるもの（30）がある。

Ⅴ類（8・9）　直立もしくは外へ開き気味の体部に外反する口縁部がつくもの。胴部最大径は口縁部との接合部にある。口縁部は横方向の二枚貝調整を施し、体部は二枚貝調整のもの（8）と下から上へのケズリがみられるもの（9）がある。

C　浅鉢

Ⅰ類（14・60）　口縁部は短く外反し、たちあがって内側にふくらむもの。肩部は小さくはりだし稜をなす。内外面ともミガキで仕上げる。

Ⅱ類(15)　口縁部は内弯しつつ外に開き、波状口縁をなすもの。体部は口縁部から一旦屈曲して大きく内弯する。内外面ともミガキを施す。

Ⅲ類（16～19・54・55・57～59）　口縁部は大きく外反し、端部は屈曲して直立する。口縁端部外面に沈線をめぐらすもの（17・19・59）がある。肩部は明確な稜をなし、内弯して底部に至る。内外面ともミガキでていねいに仕上げる。（16）は口縁部の屈曲するところを若干ふくらませて、まるい刻目をいれている。

Ⅳ類(56)　口縁部は外反しつつ上にのび、明確な稜をなして内弯し底部に至るもの。ミガキで仕上げ、沈線をいれる。

D　鉢

丸底の底部から内弯しつつ口縁部に至るもの。端部は丸くおさめる。浅めの皿状のもの（11～13）と深めのもの（50）がある。

E　椀（48・49・51～53）

口縁部と体部の区別がなく、底部から内弯しつつ上にのび、口縁部は内傾し胴部最大径より小さいもの。口縁部に平行する沈線をいれ、内外面ともミガキで仕上げる。

F　底部（20～28）

すべて凹底で、ケズリのもの（20・22・24～26・28）、ナデ（23・27）がある。

以上に述べた土器はいずれも晩期のものであり、滋賀里遺跡の編年に従えばⅡ式・Ⅲ式に相当するものと言えよう。若干古い要素をもつもの（15）もあるが、これも滋賀里Ⅱ式の中で考えてよいものであろう。　（大野　薫）

2. 石　器

河内地方において、縄文時代の好資料の少ない現在、馬場川遺跡は、縄文時代晩期のまとまった資料を提供してくれる遺跡として知られている。その意味からも、整理作業の途中ではあるが資料紹介として若干報告するものであり、それぞれの点数等についても更に整理作業が進めば訂正される。今回検出した石製品は石核９点、石鏃106点、石刀５点、石棒２点、横刃型石器４点、凹石11点、磨石15点、石錘６点、ピエス・エキスーユ19点、小型磨製石斧１点、大形蛤刃石斧２点、円盤状掻器２点、その他多量の調整石器である。以下、おもな器種について紹介する。（図版14～18）

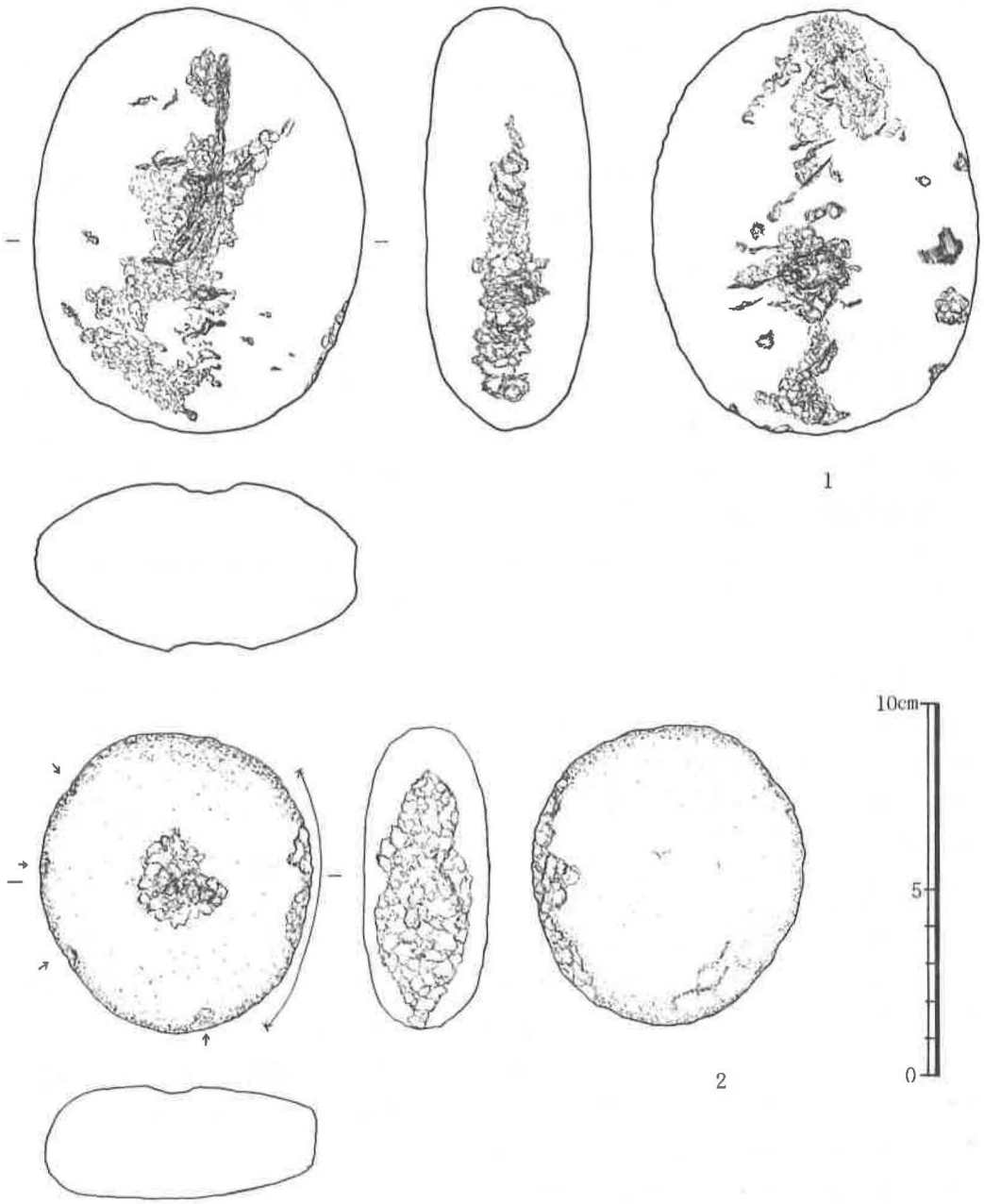
石鏃（図版９）

石鏃は106点確認しているが、今後の整理によって更に数量の増加が予想される。基部の形状によって分類すると、無茎凹基56点、無茎平基29点、無茎円基８点、無茎尖基２点で、有茎のものは確認されていない。縁辺は直線を呈するものが大半であるが、やや外反するもの、明確な肩部を有する、所謂、五角形鏃も６点みられる。五角形鏃は無茎凹基４点、無茎平基２点である。法量は、長さ1.5～2.5㎝、重さ0.8～2.2gに収約され、総じて小型の石鏃と言えよう。

調整石器（図版14）

ここでは一応、リタッチの見られる剥片を調整石器としておく。これは、石器製作者の無作為な素材選択と瞬時的な使用により、その形状は器形整形が施されないため、剥片自体の形状に還元されまちまちであり、またリタッチも単純なものが多く、その数量も多い、いわゆる不定形刃器と呼称されるものがこれに相当する。これらの石器はそのほとんどが一側線のみにリタッチが見られ、大きさ、形状はバラエティに富む。

縁辺の剥り痕を２次調整と見るか、又硬い材質の加工物に対して使用されたことによる剥落と見るかは判定しがたいが、素材の形状がまちまちであること、数量の多いことなどからして調整というより、瞬時における使用、廃棄といった性質を有するものと見なし、後者の見解をとっておく。



第7図 凹石実測図

ピエス・エスキーユ及びその素材（図版15）

ピエス・エスキーユはその素材3点を含めて、19点出土している。ほぼ原形を保っているものは8点であり、残りの8点は欠損品である。縁辺の細かな階段状剥りが顕著であり、四縁辺全てに調整を施したもの1点、3縁辺にわたるもの1点、2縁辺のもの16点である。なお、縁辺は直線を意図したものと思われる。又、1個体における裁断面の数は、四縁辺全てを裁断したもの1点、両側縁を裁断したもの2点、残りの13点は1回の裁断のみ施されている。裁断面は、ネガティヴ面であるものが圧倒的であるが、ポジティヴ面であるものが2点見られる。この2点（図版15--2,4）は素材から切り落とされた側のものであり、縁辺は他のピエス・エスキーユと同様に階段状剥り、ならびに擦消痕が見られる。

次に、使用痕であるが、階段状剥りが施された部分の擦消痕が顕著である。図版15―1は裁断面を正面左縁に有するものであるが、四縁全てにわたって階段状剥りが見られ、それらの稜線は使用により擦消されている。特に裁断面の稜線の損消が激しく、裁断が機能面作出を想定したものと考えられる。大きさは長軸2㎝未満のものから5㎝を超えるものまでである。全体の形状は上縁（裁断方向）が、下縁よりやや長い台形を呈するものが多い。

横刃型石器（図版16）

7点出土している。4点はサヌカイト製である。この石器は比較的横長のハク片の長い縁辺にリタッチを加えるか或いはそのままで刃部を形成するもので打製石包丁と呼ばれるものがこれに相当する。直刃のものが5点で残りの2点は外反する円刃である。刃部調整は表裏からなされており両刃を形成している。器形成形は顕著ではないが、折り取りによるものと思われる痕跡もあり、最終的には半月形を想定していたものと思われる。

使用痕はサヌカイト製のものは、硬い材質を対象としたらしく剥落が見られるが、他の3点は磨痕、擦痕といった使用痕が観察される。したがって両者を同一機能として把握すべきかについては若干の問題も残るが、ここでは全体形状と刃部形状によって同一器種としておく。

石核（図版17）

石核は9点出土している。塊状のものから扁平なものまで、その形状で、大きさは一様でない。原面打面、又は1～2回の剥りによって作出された打面を有するものが主であるが、図版17―6のように、細かな階段状剥りによる打面調整を施すもの、あるいは3回以上の剥り＝いわゆる多面打面石核も散見される。剥片剥り工程における企画性の有無は、個体数の少なさもあり、種々の打面の存在からも、想定しがたいが、前出の石核のように、縁辺各所において打面調整→剥片剥り→打面調整という工程を推測させうるものもある。今回、検出された石核について作出される剥片は総じて小型のものである。

石刀（図版18）

磨製石刀5点、石刀未製品3点、出土している。図版18―2は、いわゆる内弯刀のものであり、刃部側に一段の段をつけるが、峰を丸く研磨している。表裏面とも5㎜程度の条痕が長軸

に直行し連続的に見られる。石刀未製品は2点である。図版18—1は、数回の剝りによって、素材を作出し、さらに刃部に階段状剝離を施して器形を整えている。胴部又は刃部に細かな敲打痕が見られ、特に正面中央は敲打した面を研磨している。先端部は裁断されている。従ってこれら石刀未製品は、細かな敲打によって刃身を整え、最終的には研磨し磨製石刀にされるものと思われる。

石錘（図版15）

石錘は6点出土した。1点はサヌカイトの磨石を転用したものであり、砂岩質の扁平な石を利用したもの4点と、大型の円礫のもの1点である。いづれも表裏面から両極を1回ないし2回ほどの打撃を加えて機能部を作出している。形状は、円形のサヌカイト製1点、ダ円形のもの1点、砂岩質のものは形状のバラエティに富んでいるが、総じて菱形を想定していたものと思われる。

凹石

凹石は11点出土している。うち9点が円礫、もしくはそれを半割したものを用い、その表面側縁に敲打痕が残っている。敲打痕観察により、その敲打主体の敲打部分は長さ15〜20㎜、巾1〜2㎜程度の扁平なものと、直径5㎜程度の円柱状のものの2種類が推定される。前者によるものは近畿地方縄文後晩期特有の、主軸線よりやや角度をつけて敲打される凹石である。又円礫を用いたものはそのほとんどが、表面に磨痕、縁辺に敲打痕を残しており、磨石・敲石としての併用が想定できる。10点が表裏ともに敲打され凹みを残している。

磨石

磨石は凹石と共用するものが多いため、単独の磨石は4点である。うち1点は比較的大形の円礫が半割されたものであるが、他のものはいづれも小形の円礫で、全面にわたって研磨痕が見られる。　（松岡良憲　水野昌光）

3. 土　偶（表紙カット）

縄文晩期土器と同じ胎土で、妊娠した女性像を抽象的かつ簡潔に表現している。頭部及び左手は欠損し乳部は剝落しているが、高さ11.8㎝、厚さ約2㎝、両手部巾9.5㎝、脇部3.6㎝、腹部6.7㎝を測る。腹部は約1㎝程ふくらませているが、裏面は全体を約5㎜内へ凹めている。脚は短く、両側から尻の部分に細いへ状の線刻をつけ、脚間には径2.5㎜の小孔をあけている。

（原　田）

参考文献

1　東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報　4　「馬場川遺跡Ⅰ」1970
2　東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報　6　「馬場川遺跡Ⅱ」1971
3　東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報　14　「馬場川遺跡Ⅲ」1975
4　東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報　16　「馬場川遺跡Ⅳ」1976
5　東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報　17　「馬場川遺跡Ⅴ」1977

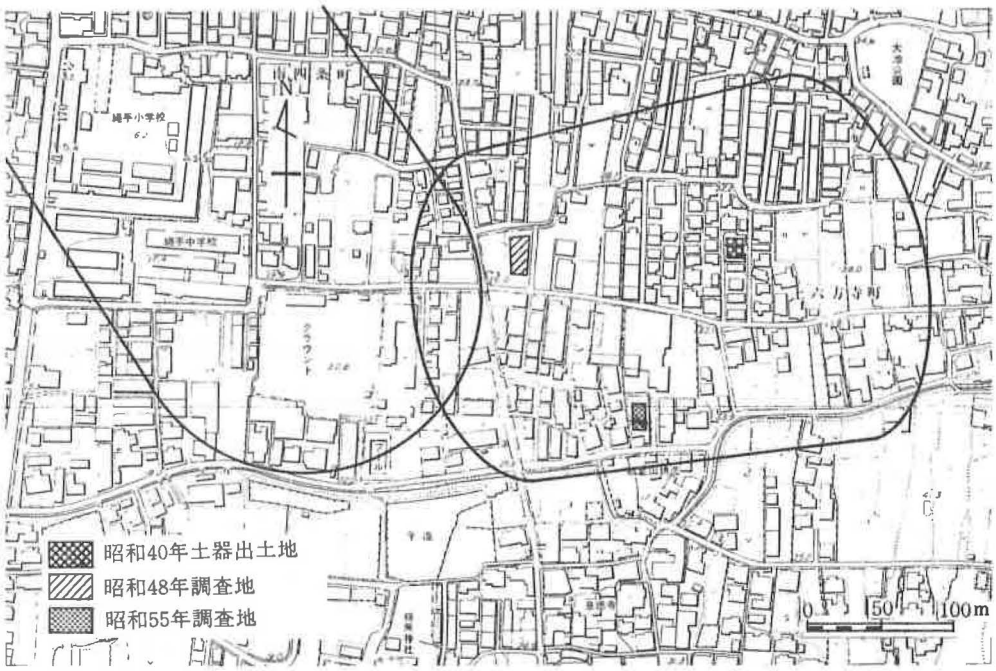
第３章　上六万寺（幸殿）遺跡の調査

1.　遺跡の概要

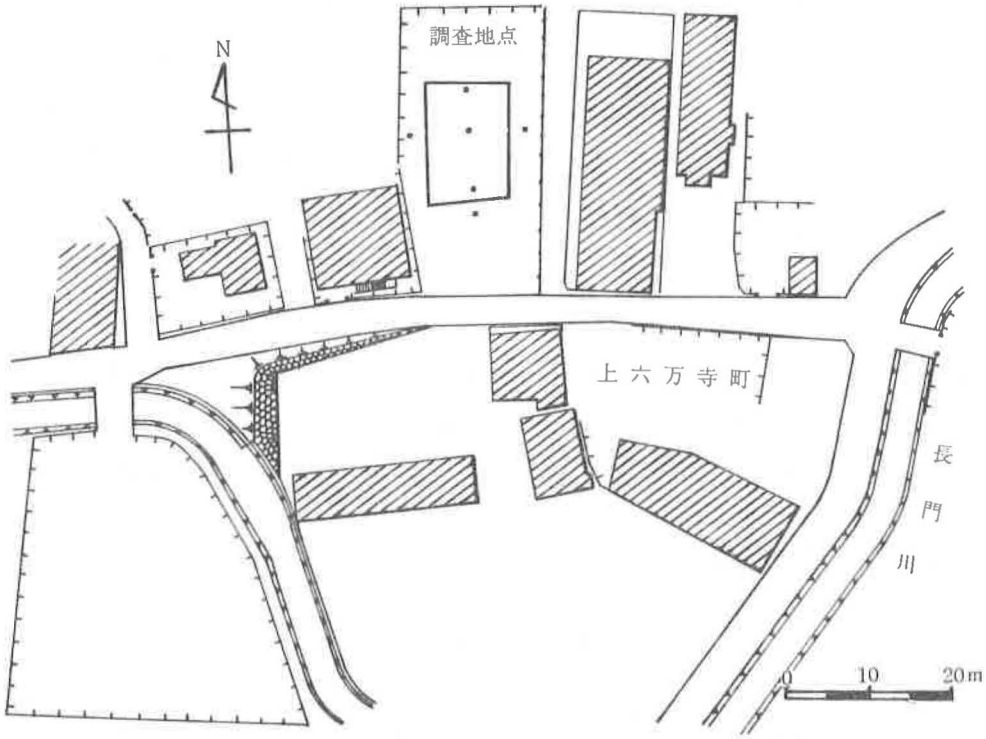
上六万寺遺跡は、上六万寺町1957番地において昭和40年頃住宅建設に伴う基礎工事中に弥生土器が出土し、また周辺部にも弥生～古墳時代の土器が散布していることから周知されるようになってきた。昭和46年度には文化財保存事業として埋蔵文化財包蔵地の現状調査を実施し、過去の遺物・遺構の地点を中心に遺跡の範囲が設定された①。それによれば旧地名（字名）をとって幸殿遺跡とし、その範囲は上六万寺町1394～1420、1903～1970番地とされた。

昭和48年には、個人の宅地造成に伴う試掘調査を上六万寺町1973番地において実施した②。この結果、中世の溝・石組井戸等の遺構、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・砥石・鉄釘などの遺物が多量に出土した。特に、第３トレンチを中心に出土した弥生土器は二次堆積によるものではあったが後期の一括資料として土器編年の上で貴重な存在となった。この時点で遺跡は幸殿遺跡から現在の町名でもある上六万寺遺跡と呼ばれた。遺跡の内容は発掘調査がほとんど行なわれていないため明らかではない。

今回、調査を実施した地点は上六万寺町1412番地－１で、昭和48年の調査地点の南東150ｍの所である。この調査地は、すぐ南側に鳴川谷を形成した鳴川（長門川）が流れており、地形上から考えれば遺跡の南限部分にあたるものと思われる。



第８図　上六万寺遺跡調査対象地位置図



第9図　調査地点位置図

2. 層　位

今回の調査地は、すでに工場が建っていたところであり機械を据えるためのコンクリートが深くまで打ち込まれていたこと、建物の解体に伴って出た廃材の一部を埋めて処理していたこともあって、部分的にかなり深い所まで破壊あるいは撹乱されていた。(第10図)

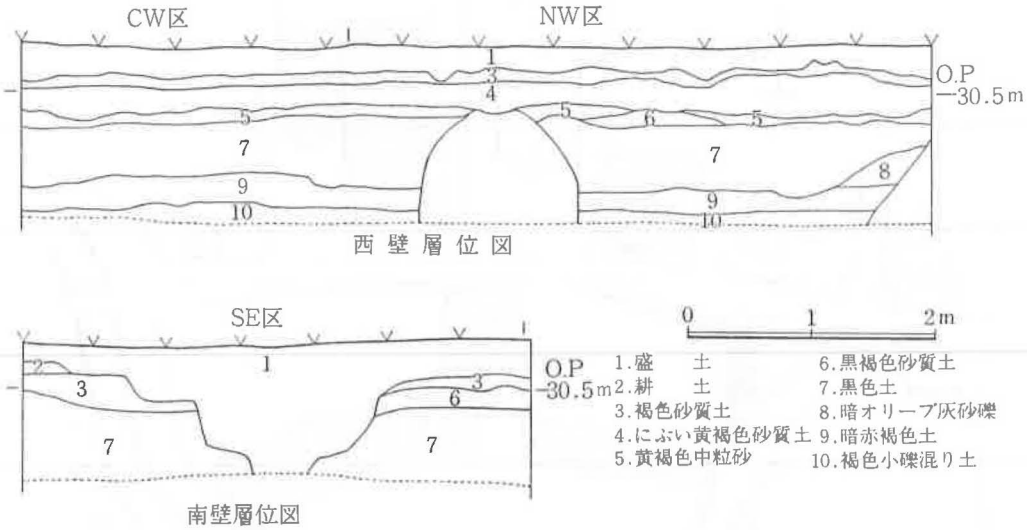
基本的な層序は、上から第1層盛土、第2層耕土(暗緑灰色砂質土 10G3/1)、第3層褐色砂質土(10YR4/4)、第4層にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)、第5層黄褐色中粒砂(2.5Y5/4)、第6層黒褐色砂質土(10YR3/2)、第7層黒色土(2.5GY2/1)、第8層暗オリーブ灰砂礫(5GY 4/1)、第9層暗赤褐色土(2.5YR3/2)、第10層褐色小礫混り土(7.5YR4/4) となる。各層は若干ではあるが東から西へ、北から南へと傾斜している。遺構のベース面(第9層直上)においては、トレンチの北東端と南西端で約50cmの比高差が認められた。

第1層　盛土、昭和30年代に入り工場建設に伴って行なわれたものである。

第2層　旧表土、昭和30年代まで水田であった。

第3層　厚さ5～30cmで調査地全域に認められる。

第4層　第6層を切り込んだ溝の埋土である。瓦器・須恵器・土師器・弥生土器等の破片が出土しており、中世に整地あるいは埋められたものである。調査地の西端近くでの



第10図　西壁・南壁の層位

み認められた。

第５層　第４層と同じ溝内の堆積土である。遺物は全く含んでいない。

第６層　奈良時代の遺物包含層。弥生後期の遺物も多く含んでいる。

第７層　弥生後期の遺物包含層。厚さ40～50㎝で全域にわたって認められた。

第８層　調査地北側にのみ部分的に認められる。無遺物。

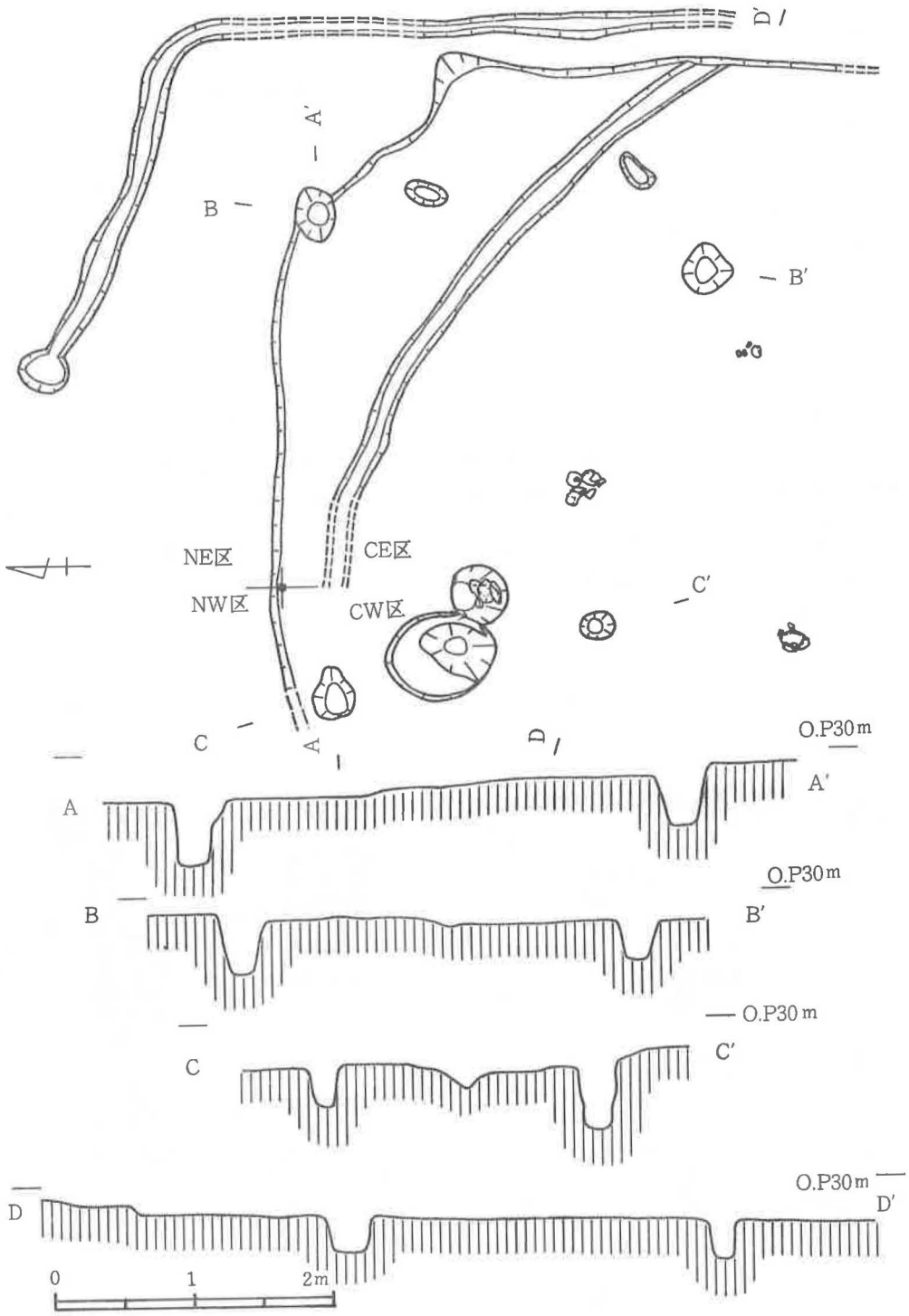
第９層　遺構のベース面となっていたものであるが、遺構の残りが悪くたぶんこの層の上面が削平されたためと思われる。調査地南側では現代において下層まで破壊されているため遺構等の検出はできなかった。

3. 遺　構

第６層黒褐色砂質土上面で溝を、第９層暗赤褐色土上面で弥生後期の住居跡を検出した。

溝のベース面の水準o.p 30.4ｍ位で、溝は北から南にゆるやかに傾斜している。溝の深さは北側で19㎝、中程で18㎝、南側で17㎝あり旧地形に沿った形である。肩は直線的で人為的に掘られたものではあるが性格は不明である。溝の幅は不明であるが検出幅は最大2.7ｍである。溝内からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦器片が出土した。瓦器は大和型と呼ばれる椀で、口縁端部に沈線を一条めぐらし、暗文も細くて緻密である。出土遺物から中世（平安末～鎌倉初頭）に掘削され埋められたものと思われる。

住居跡は、調査地の中央部で検出した。推定規模5.5ｍ×4.2ｍ、面積23㎡の長方形を呈する。深さは４～10㎝をはかり、中央部から北東寄りに南東から北西に走る幅16～20㎝、深さ５



第11図 住居跡平面実測図

cm、断面〜形の小溝を検出した。床面には6カ所のピットを検出した。このうち主柱穴と考えられるものは4個でその大きさ・深さはそれぞれ39×32cm、37cm、32×34cm、29cm、34×30cm、46cm、20×24cm、30cmである。炉跡と思われるものは中央部の北西寄りで、長径80cm、短径64cmの楕円形、深さ18cm、炭化物を多く含んだ黒色弱粘質土が堆積している。明確な焼土面は検出されなかった。住居跡内からは弥生後期後葉に比定される細頸壺（8）、甕・高杯（22）が出土したが遺物は非常に少ない。

4. 出土遺物

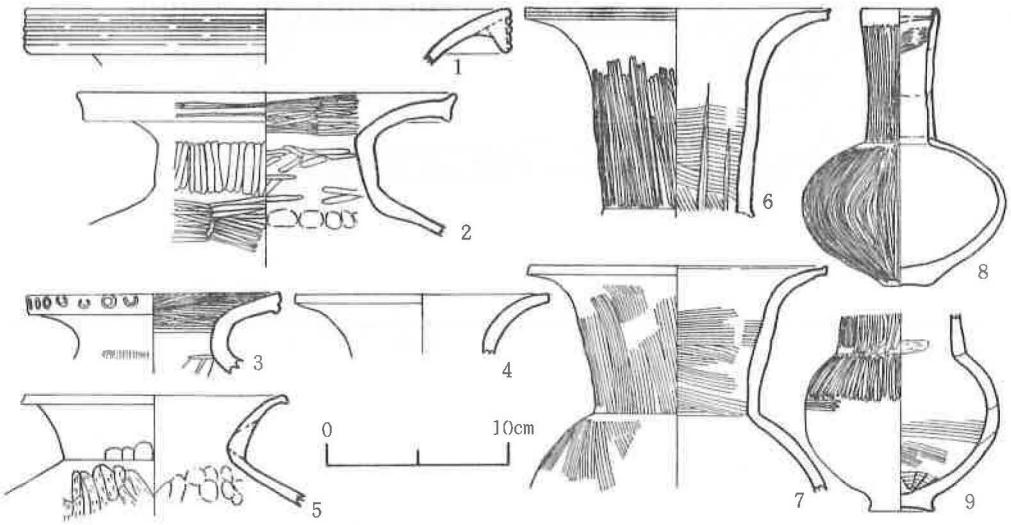
今回の調査で出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器などである。特に弥生土器は第7層黒色土から多量に出土し、弥生後期の資料として重要である。以下、器種ごとに記述する。

広口壺A（1）

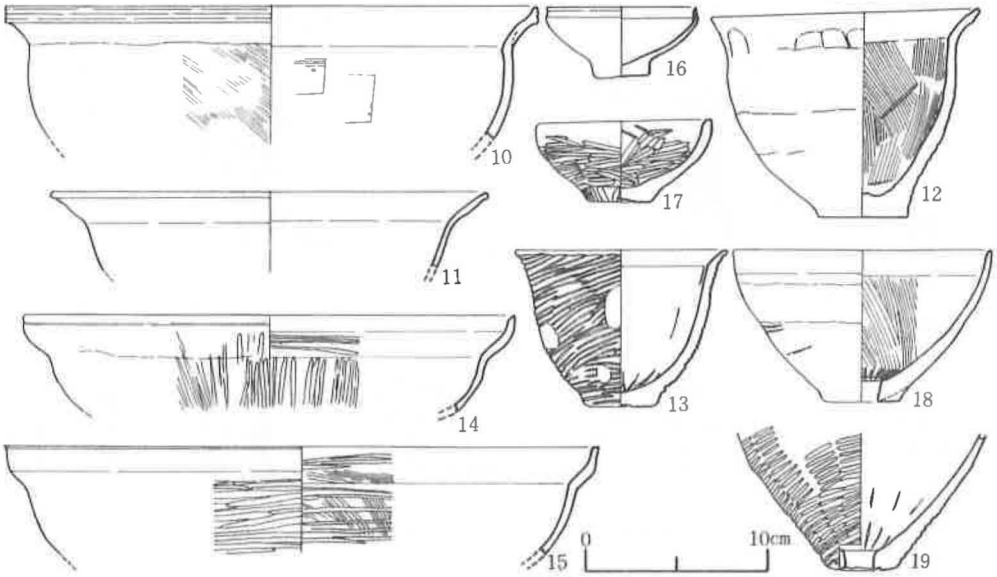
球形に近い器体に、短かく直立したのち外に開く口頸部をつけ、口縁端部を下方に拡張して数条の擬凹線をめぐらし、竹管文を押した円形浮文をその上に貼付するのが代表的な装飾法である。擬凹線のかわりに櫛描の波状文や直線文を施したものや、無文で竹管押圧文をもつもの、無文のものもみられる。大型のものが多い。

広口壺B（2）

口頸部がやや内傾しながら立ち上がり、口縁部が大きく屈曲して開く。口縁端部は上下に肥厚する。口頸部内外面にヘラミガキ、口縁端部にヨコナデを施している。色調は浅黄色（2.5



第12図　弥生土器実測図　壺1〜9



第13図　弥生土器実測図　鉢10～19

Y8/4)。胎土には0.1㎜大の長石、石英等を多く含む。搬入品。

広口壺C　（3）

体部から頸部をへて外反して開く口縁部までなだらかに移行する。口縁端部はやや肥厚する。端面には竹管押圧文をもつ。

壺D　（4・5）

口縁部が強く外反するもので無文である。体部と頸部との間に明瞭なくびれをもつ。口縁端部が下方にやや拡張するもの（5）、そのまま角張って終わるもの（4）がある。

壺E　（6・7）

やや外傾気味に直立する頸部に外反する口縁部をもつ。6は内外面ともハケメによって調整したのち、縦方向のヘラミガキを施している。7は内外面ともハケメにより調整する。

細頸壺　（8）

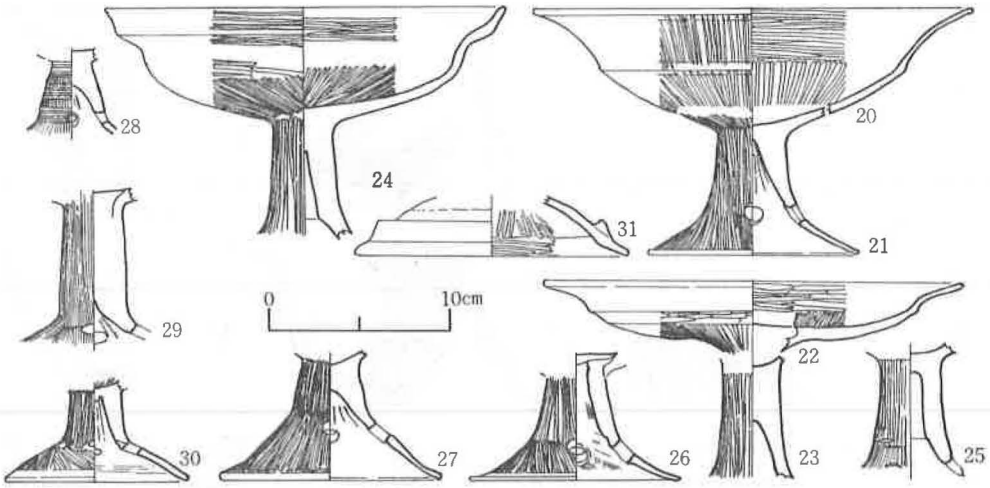
扁球形の器体に、上部で少し開いた細い円筒形の口頸部をつけたもの。全体をきれいにヘラミガキした入念なつくりである。小さくてやや上げ底ぎみの底部をもつ。

長頸壺　（9）

球形の器体に筒形の口頸部をとりつけた形である。器体外面に縦方向のヘラミガキ、内面はハケメ調整で部分的に横方向にヘラケズリを施す。

鉢A　（16・17）

小型の直口鉢である。16の口縁はつまみ上げ気味にヨコナデするため端部は尖っている。外面はナデ、内面はハケメののちナデによって仕上げている。17は内外面とも粗いヘラミガキを



第14図　弥生土器実測図　高杯20～31

施す。底部は両者ともやや上げ底である。

鉢B　(10～13)

口縁部がわずかに「く」の字状に外折したものである。やや大型の10・11、中型の12・13がある。10の口縁端部はつまみ上げ気味にヨコナデを施し擬凹線を施す。12は、外周の半分に右下がりのタタキメ（2.5条／cm）残りの部分は未調整で粘土の継ぎ目を残す。13はタタキメ（3条／cm）をもつもので、頸部の内面には稜を形成する。内面はハケメを施したのち丁寧にナデ消す。

鉢C　(14・15)

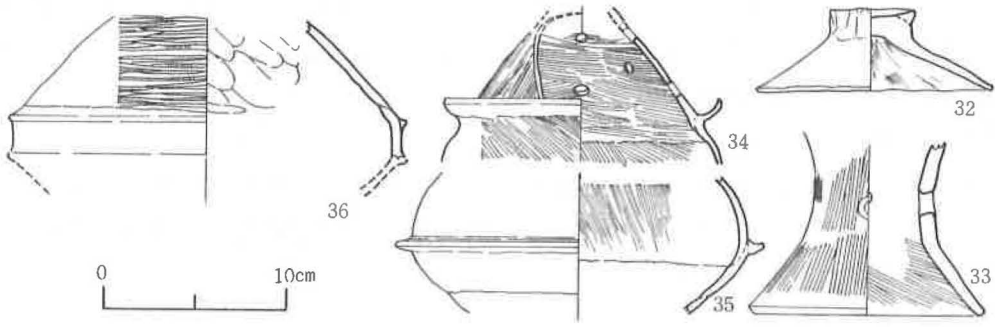
口縁部は外折するが途中で上方に角度を変えて立ち上がるものである。端部は丸く終わるもの（14）と面をもつもの（15）とがある。14の体部は内外面ともハケメののちヘラミガキ　15は内面がハケメののちヘラミガキ、外面はヘラミガキ、口縁部はハケメ、ヘラミガキののちヨコナデにより調整する。

有孔鉢　(18・19)

鉢の底面に孔をあけたものである。18・19とも直口の鉢で内面から外面へ穿孔している。18は外面タタキのあと丁寧にナデ消している。19は左下がりのタタキメ（3条／cm)、内面はハケメののちナデにより調整する。

高杯A　(20・21)

曲折してたつ口縁部をもつ杯部を、裾ひろがりの高い脚台にのせた高杯である。20は大きく外反し口縁部高と杯体部高とがほぼ等しいが、21はさらに大きく外反するため杯部は浅くなっている。20の内面はハケメののちヘラミガキ、外面はタテヘラミガキである。



第15図　弥生土器実測図　甕用蓋・器台・手焙形土器

高杯B

鉢C・甕Bと同じ口縁部で口縁部全体を内弯させ受部を形成するものである。口縁部外面には擬凹線を3～4条施す。脚は円錐状になった棒に粘土を巻きつけて成形している。内面にしぼりめが残る。

高杯脚部A　(25)

直立する脚柱部に屈曲して裾部がつく。円柱状の棒のまわりに粘土をはりつけ成形したのち棒を回転させながら抜いたものである。外面はタタキメののちヘラナデ、ヘラミガキ、内面はハケメにより調整する。

高杯脚部B　(26・27)

中空の脚柱部とゆるやかに拡がる裾部をもつ。脚部から杯部にかけて連続的に成形を行ない円盤状の粘土を埋め込むことによって杯底部を形成させる（円盤充塡法）ものである。外面はハケメののちヘラミガキ、内面はハケメにより調整する。

高杯脚部C　(28)

細い脚柱部に6本からなる櫛描き沈線文をつける。

高杯脚部D　(29)

円柱状の中実の脚部から屈曲する裾部をもつ。内外面ともハケメにより調整する。

高杯脚部E　(30)

ごく短い直立部分と屈折して開く小形の脚部である。内面はハケメのあとヨコナデにより調整する。接合痕が脚部中位に認められる。

高杯脚部F　(31)

貼付け凸帯により2段にわけられた裾部をもつ。中実の柱状部をもつものと思われる。高杯の脚部としたが器台の口縁部となる可能性もある。

甕用蓋　(32)

直径12.8cm、高さ4.5cmの笠形の土器である。天井部のつまみは鉢にみられるような上げ底

を逆転した形であり、外面には指圧痕がみられる。内面はハケメによる調整であるが外面は摩耗が著しく不明である。他にも同タイプで直径7.6cm、高さ3.1cm、内面ヘラミガキ、外面ヘラミガキののちナデによる調整を施したものがある。

器台 (33)

上下に大きく開き、中央部のせまい鼓胴形を呈する中空の土器である。裾部から口縁部に至るまでなだらかなカーブをえがき、内外面とも粗いハケメによる調整である。器体の円孔は焼成前に外面から内面に向って4孔あけている。

手焙形土器 (34〜36)

34は受口状の口縁部を有する腹部の張った鉢形の器体に半ドーム状の覆いをかぶせた土器で、内外面ともハケメを施す。受口状の口縁端にはヘラ先による刻み目を施す。覆いは1側に向って大きく口を開き、開口部はやや傾斜する。35は腹部に凸帯をめぐらしたもので内面にハケメを施す。36は腹部の短かいもので、ドーム外面はヘラミガキののちナデ、内面はユビナデによる調整である。

甕A (37〜44、48〜55)

丈高の器体に「く」の字状に外反する口縁部をもつ。最大腹径が体部上半にあるもの(37〜39・41・43)、ほぼ中位にあるもの(44)、体部径が口縁部径を凌駕するもの(37〜43)、体部径と口縁部径がほぼ等しいもの(44・50)がある。タタキメは右上がりで分割成形にともなう主軸の方向が異なるもの(38・39・41・43)、連続ラセンタタキ法を行なうもの(37・42)がある。タタキメの粗さは1cmあたり2条が37・44、2.5条が41・42、3条が38・43、4条が39・40である。口縁部の形態には以下のようなものがある。(a)口縁端部を面取りすることにより角張っているもの(37〜39)、(b)下方にやや拡張するもの(40)、(c)端部に擬凹線を施すもの(41・42・50・54・55)

甕B (45・46・56・57)

口頸部は外反するが途中で角度をかえて内弯しながら立ち上がる口縁(いわゆる受口状口縁)をもつもの。口縁端部が丸みをおびるもの(45)、面をもち角張るもの(46)がある。45のタタキメは体部下半が右上がり、上半が水平、右下がり、内面はハケメののちナデによる調整である。46は比較的細かい(3.5条/cm)右上がりのタタキメの上に部分的に右下がりのタタキメを施し、のち体部下半をハケメにより調整する。

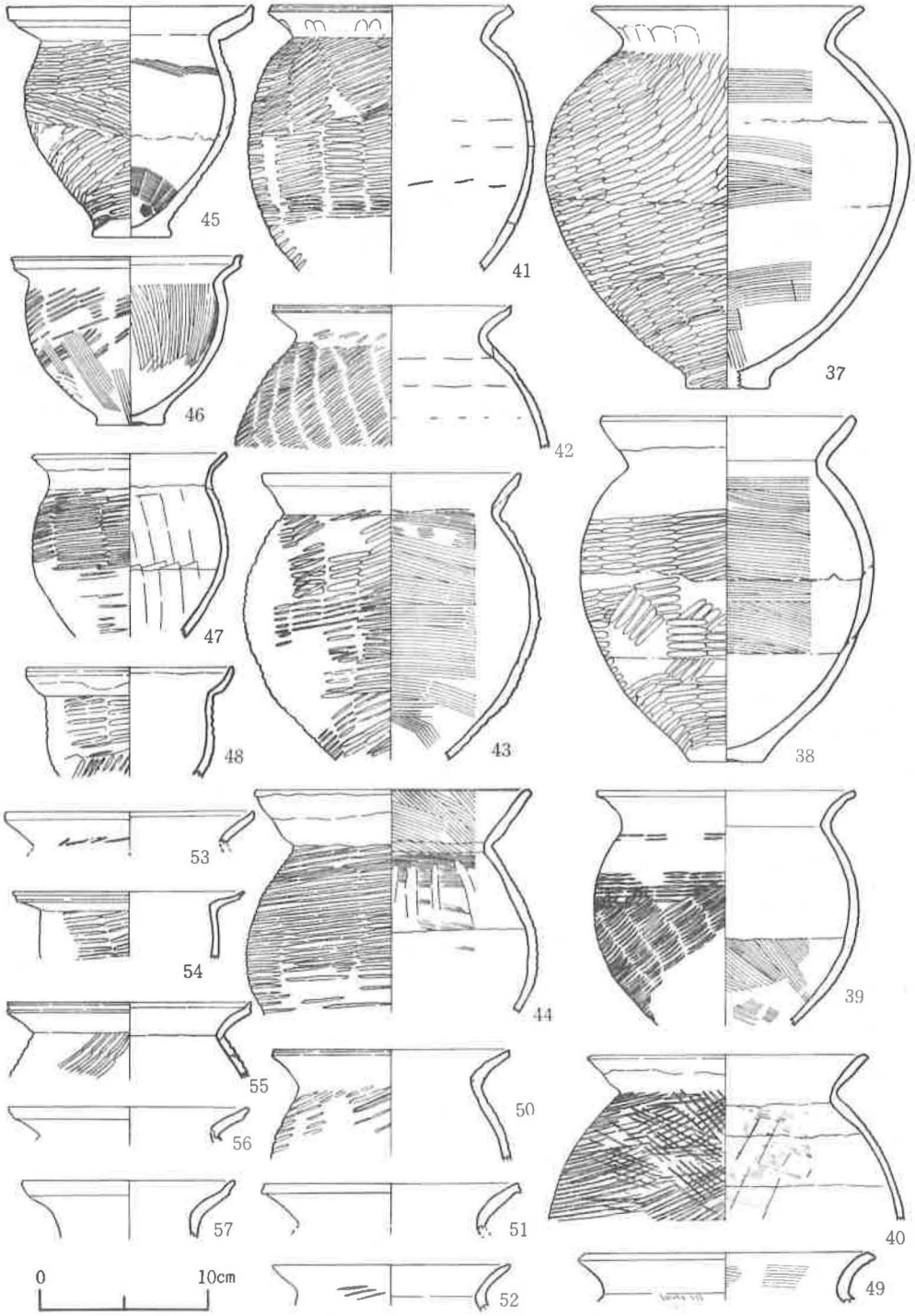
甕C (47)

体部上半からゆるやかなカーブをもって外反する口縁部を有する。外面はやや右上がりのタタキメ(2条/cm)、内面はハケメののちナデにより調整する。

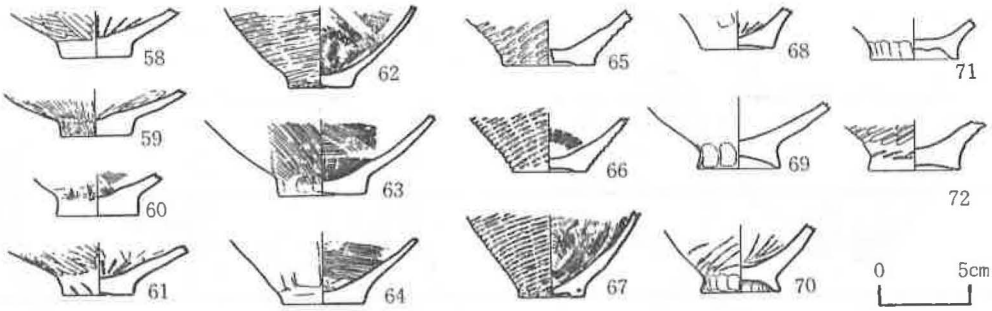
底部

底部は全部で105点出土した。形態により6つに分類できる。

底部A (58〜60)



第16図　弥生土器実測図　甕37～57



第17図　弥生土器実測図　底部58～72

平底で器壁が厚く「く」の字状に屈曲してたち上がるもの。58・59は外面ハケメののちヘラミガキ、内面はくもの巣状のハケメののちナデ、60は外面にタタキメを施したのちハケメにより調整する。

底部B　(61～63)

「く」の字状に屈曲してたち上がりやや上げ底を呈するもの。外面の調整は61がヘラミガキ62がタタキメ、63がハケメである。内面はいずれもくもの巣状のハケメである。

底部C　(64)

底部は厚くやや上げ底を呈するが、屈曲せずにすぐ外傾するものである。外面はハケメののち丁寧なナデで仕上げている。

底部D　(65～67)

底部中央がくぼんだいわゆるドーナッツ底で屈曲せずに外傾してたち上がるもの。

底部E　(68～70)

高台状の底部をもつもので外面に指頭圧痕が残る。

底部F　(71・72)

凹面状にくぼむ底部をもつものである。72は、圧痕が残り底面をヘラ状の工具で削っている。

歴史時代の遺物

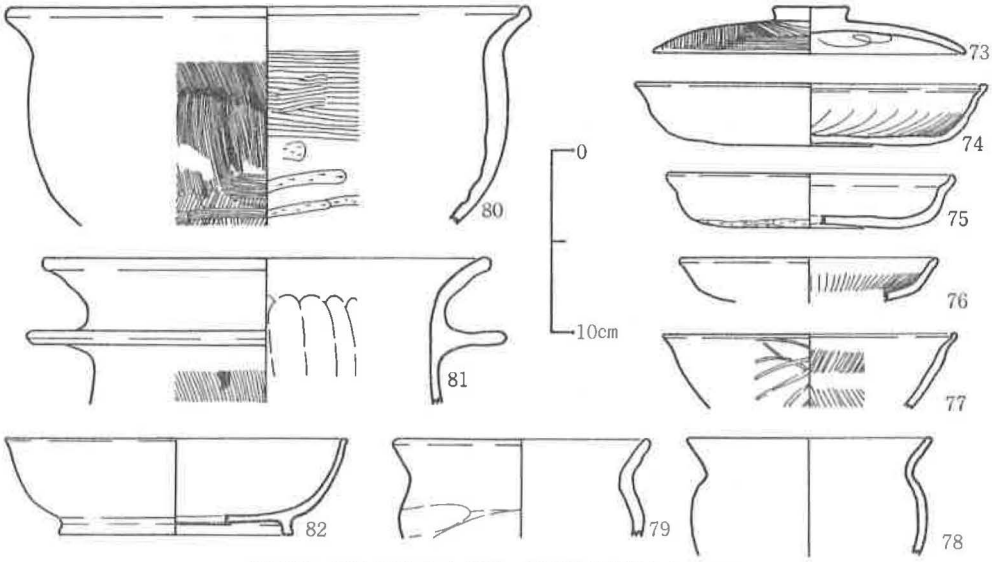
土師器の杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、須恵器の杯・壺・椀、瓦器椀等がある。

杯蓋　(73)

上面が平らで低いつまみのつく頂部からまるく縁部にいたるもので端部は丸くおさめる。内外面はヨコにナデたのち上面はつまみを中心に4度にわけてヘラミガキを施し、ついで縁部をヨコ方向に全周を6度に分けてヘラミガキする。高台のつく杯の蓋である。

杯　(74～76)

口縁部のやや開いた浅い土器である。底部外面をヘラで削って仕上げたもので、底部内面と口縁部外面はヨコナデによる調整である。74は内面に斜放射状暗文、底面にラセン状暗文をもつ。75は直線的に外傾し端部は内側に巻き込まず丸くおわる。



第18図　歴史時代の土師器・須恵器実測図　73～82

椀　(77)

小さな平底とわずかに内弯しながら開く口縁部からなるやや深い器形である。内外面をヨコナデしたあと、外面に青海波状暗文、内面に2段の放射状暗文を施す。

甕　(78～80)

短く外反する口縁部に丸い体部を有するものである。口縁部はヨコナデ調整を施すが体部は未調整で指頭圧痕を多く残す。80は外面タテハケ、内面は上半がヨコハケ、下半がヘラケズリののちナデを施す。

羽釜　(81)

長手の胴部に外反する口縁部がつき、胴外面のハケメを施したのち口縁部との境に鍔をつけたものである。

須恵器杯　(82)

やや内弯しながら立ち上がる杯部をもつもので端部は丸くおさめる。高台はやや外に向く。

5.　まとめ

遺構では、中世の溝、弥生時代後期の竪穴住居跡を検出した。住居跡は、推定規模5.5m×4.2m、面積23㎡の長方形プランである。床面には6カ所の柱穴を検出し、住居跡中央の北西寄りに炉跡がある。壁面下には周溝は存在しなかった。住居跡の年代は、出土遺物の年代観から弥生時代後期後葉に比定できる。

東大阪市内で検出された弥生時代の竪穴住居跡は今回のものを含め8例でそのうち後期のものは5例である。住居跡の平面プランや規模は、岩滝山遺跡[3]第1号住居跡が円形で直径約5m、面積にしておよそ15.7㎡、同第2号住居跡は隅丸方形状で一辺5m、鬼塚遺跡[4]は長方形で6.2m×4.6m、面積28㎡、皿池遺跡[6]はやや不整形な長方形で5.5m×4.5m、面積25㎡であ

る。家屋構造は、岩滝山遺跡第1号住居跡が柱穴の掘方などから中心方向に対して傾いた恰好で柱を立てていたのではないかと推定されている。皿池遺跡では主柱と考えられるものが6個で、4隅の柱が桁を支え中央の2個が直接棟木を支えていたと推定され、住居内も溝によって区画されている状態であった。鬼塚遺跡では住居が火災に遭っており、竪穴内に遺存している炭化材の種類、状態などから板葺屋根であったものと思われる。上屋の構造は保存のために床面まで掘らなかったため明確ではない。各住居跡の年代は、出土遺物の年代観から岩滝山遺跡が後期前葉、鬼塚遺跡が後期中葉、皿池遺跡が後期中葉〜後葉となる。今みてきたように住居跡の平面プランは、前葉から後葉にかけて円形・隅丸方形・長方形へと変化してゆく。住居跡の構造については資料の不足や遺存状態の悪いこともあって明確ではないが、壁面下の周溝については全くめぐらないのが今回を含めて3例あり、残る2例についても一部にだけしかめぐっておらず、これが中河内の生駒山西麓にある住居跡の特徴となるのであろうか。現在のところ住居跡の発掘例があまりないため断言できないが今後の資料の増加をまって、集落の構成・機能・性格、さらには生業の問題などの細かい検討を加えてゆかねばならない。

次に出土遺物である。特に多量に出土したのは弥生後期の土器である。甕は、最大腹径が体部上半にあるものが多く、タタキメの主軸が成形時の接合痕と対応しながら変化する分割成形技法⑥を行なうもの、逆円錐台部分の成形第1段階をおえたあとタタキメの主軸の方向を変えずに連続的に施す連続ラセンタタキ手法を用いるもの、「く」の字形に外反する口縁部の途中から角度を変えて立ち上がる、いわゆる受口状口縁と呼称されるものなどがある。連続ラセンタタキ手法を用いる甕は、北鳥池遺跡下層式に見られるような体部の球形化やそれに伴なう最大腹径の下降化は見られないし、タタキメ手法自体も技術的に稚拙である。受口状口縁をもつ甕は、端部を少しつまみ上げ外面に擬凹線を施したものまで含めると、甕口縁部の破片総数214個体中の113個体（52.8%）も占めている。

壺では、古い様相を示す広口壺Aが残るがわずかであり、壺Eや細頸壺など新しい様相を示すものが多い。有孔鉢では甕の成形第1段階の逆円錐台部分をユビナデするだけ（擬口縁）のものが多い。高杯では、杯口縁部の外反度が大きく、長大化の傾向がみられ杯部が浅いものとなっている。脚部についても中実脚や貼付け凸帯により2段に分けられた据部をもつ脚が現われる。以上のことから、今回出土の土器は、鬼塚遺跡D地点、同E－1・2地区、西ノ辻遺跡E地点より若干新しく、北鳥池遺跡下層資料、船橋遺跡第9トレンチ資料より古く位置づけられる。しかし、北鳥池遺跡下層資料との間にはまだ隔たりがあるように思われる。（勝田邦夫）

注 ① 東大阪市教育委員会『東大阪市における埋蔵文化財包蔵地の現状1』1972.1 同『文化財要覧Ⅱ』1973
② 福永信雄「上六万寺遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』1975
③ 藤井直正・荻田昭次・北野保『岩滝山』東大阪市教育委員会 1971
④ 芋木隆裕『鬼塚遺跡Ⅱ・若江遺跡』東大阪市教育委員会 1979.3
⑤ 芋木隆裕『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡』東大阪市遺跡保護調査会 1979.3
⑥ 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号 1974.3

第4章　山畑66号墳の調査

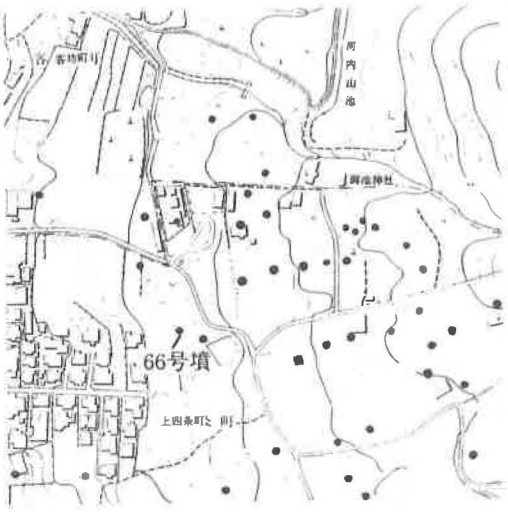
1. はじめに

山畑古墳群は、東大阪市上四条町に所在する古墳時代後期の群集墳である。その数は完存するもの18基、石室の一部を残すもの18基をかぞえるが、往時には100基近くあったとみられる。

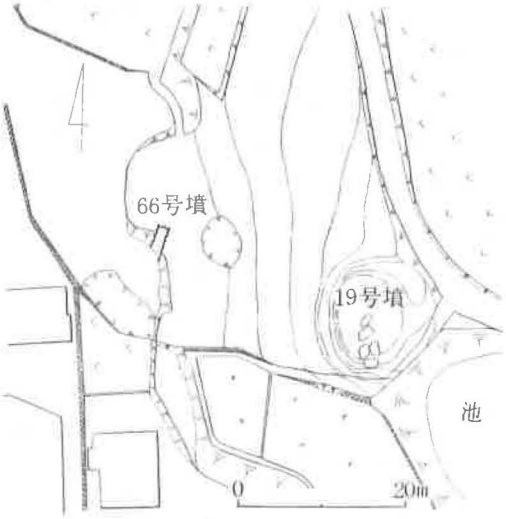
山畑古墳群は、生駒西麓に存在する多くの後期群集墳のなかでも発掘調査の行なわれた古墳が比較的多く、石室内の埋葬施設がある程度判明している。その特徴としては、埋葬施設に組合式石棺と木棺が共に用いられ、ほとんどすべての古墳で追葬の状況が認められること、副葬品に馬具類が多く認められることなどがあげられる。古墳群の形成は、副葬品とりわけ須恵器の年代観からみて6世紀中葉に始まり、7世紀初頭には築造を停止して追葬のみとなり、7世紀中葉には完全に機能を停止する。石室の平面形態には、両袖式、片袖式、無袖式に分かれるが、このうち無袖式の例には大型のものを含んでいて、副葬品の年代からは畿内の一般的な無袖式石室の築造にやや先行する6世紀後半に築造時期をおくことができる。

山畑古墳群が分布する山麓一帯は、近世以後に棚田が形成され、標高90m付近まで及んでいる。そのため墳丘が削り取られて石室の下半部のみを残す古墳も少なくはない。これまでに発掘調査が行なわれた古墳の多くもこうした状態にあったが、幸いにも石室床面は破壊を免れていたものが多い。今回調査を実施した古墳は、すでに墳丘および石室の大部分を削平されていたものの、玄室の一部が棚田の下に遺存していたために、土地所有者の土取り作業によって露呈し、古墳の確認されたものである。この古墳を山畑66号墳と呼称する。山畑66号墳は、東に19号墳と接し、24・25・26号墳などに近い標高90mを測る位置にある。

調査の概要を記すにあたり、ご協力を賜わった土地所有者出口弘氏に深い謝意を表したい。



第19図　山畑古墳群分布図(1/5000)



第20図　周辺測量図(1/900)

2. 調査の概要

経過　昭和55年4月、東大阪市立郷土博物館へ通じる道路より南へ30m程入った空地で、郷土博物館職員が横穴式石室らしい石組みが露呈しているのを確認した。当時、石室の横断面が削られた崖面に現われていたが、石室の遺存がどれほどであるか判断できなかった。そのため文化財課は土地所有者に土取り作業の中止を要請するとともに、石室の遺存状況を確認するための発掘調査を行なうこととした。

発掘調査は、まず石組み平面の広がりを調べたところ、石室は玄室の奥壁寄り約3mを残すのみであることが明らかとなった。そして8月1日～13日にかけて石室内部の発掘を実施した結果、少範囲ながら床面の敷石が存在することや、原位置を保つと思われる土器、鉄釘を検出した。調査終了後、石室は埋め戻し、土地所有者の協力を得て現状にて保存されている。

石室　石室は、玄室奥半部の2段目までの石組みを残す奥壁、側壁から成る。奥壁での玄室幅1.4mの比較的小型の横穴式石室である。側壁は、奥壁に向って右側3.5m、左側2.5mを残し、この状況から石室の袖の有無は断定できないが、石室幅や小型の石を用いることなどから無袖式かそれに近いわずかな袖をもつだけの有袖式かと思われる。(第21図)

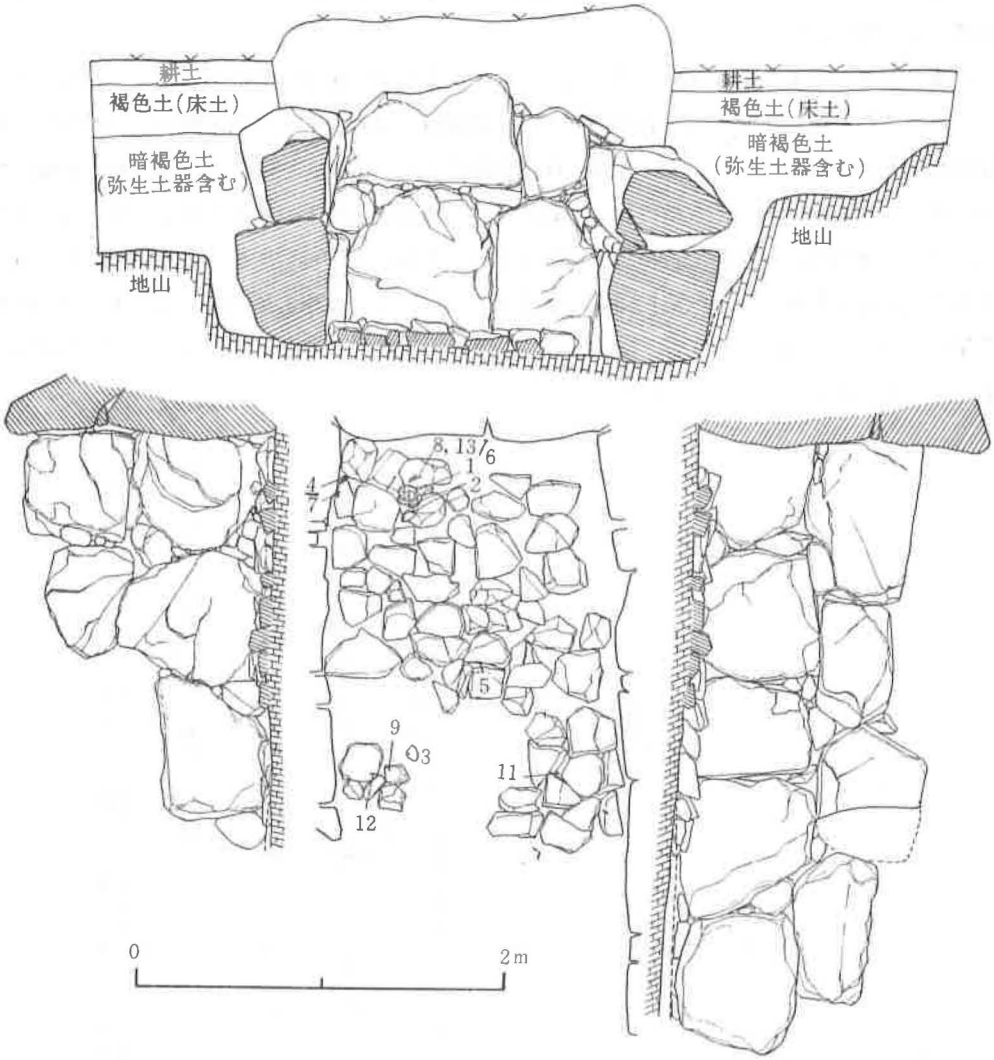
石室床面は敷石施設を有する。敷石は20～30cmの自然石を中心とし、部分的に無いところをみるが本来は玄室相当床面のほぼ全面に敷設されていたとみられる。敷石上の遺物としては、土師器坩1個体、須恵器蓋2個体、鉄釘10数本が検出された。このうち奥壁近くの土師器坩、須恵器蓋はほぼ完形に復原できるもので、敷石上に置かれた状態から動いていない。鉄釘は、敷石に接する中央から羨道近くのものと、敷石より浮く奥壁沿いのものとに分かれる。このような遺物の出土状況から、玄室内には右奥部に副葬品が置かれ、左側壁に沿って鉄釘接合木棺が置かれていたと考えられる。敷石上の推定木棺の位置には骨片も認められている。

石室構築方法の調査では、地山である黄褐色礫混り粘土層に幅約3mの墓壙が検出された。墓壙は東から西へ下降する傾斜地に穿たれたことから、東で深く(約1m)、西で浅く(約0.5m)掘って壙底を水平にしている。また、地山上には、弥生土器を含むブロック層を含むことから、古墳築造前に山畑弥生遺跡の遺物包含層が存在したとみられる。

出土遺物　遺物の出土量は、前記のようにあまり多くはない。特に副葬品としての須恵器が蓋2個体しかないことは、埋葬時の副葬品の構成がすでに失なわれていることをあらわしている。各個体の観察結果は以下のとおりである。(第22図)

土師器坩1　砂粒を含まない精良な胎土。明橙色を呈し、体部下半に6×5cmの黒斑を有する。肩部に最大径をもつ球形の体部に、わずかに外折する口縁部が付く。体部外面には成形時の指頭圧痕を顕著に残している。内面は全体をナデ調整により平滑である。口縁部はヨコナデを丁寧に行ない、端部は外面に若干肥厚しておわる。口径9.6cm、器高7.5cmをはかる。

須恵器蓋2・3　いずれも天井部中央に宝珠つまみが付く蓋で、内面にかえりを有する。これらとセットになる杯は検出されなかった。



第21図　山畑66号墳石室実測図(1/40)

鉄釘4～13　全長が明らかなものはないが、10cm前後の鉄釘である。頭部を残すものは、鍛造によってL字形に作り出している。これらが組合式木棺に使用されていたことは、部分的に木質部の付着が認められる例から明らかである。釘と直交する木目は頭部に近い上半に付着し、釘と平行する木目は下半に付着している。

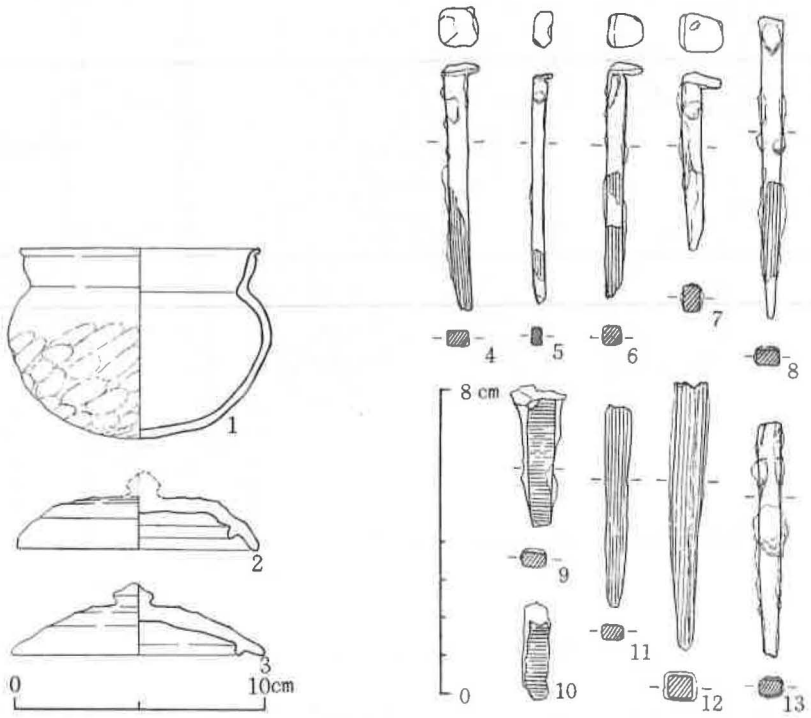
以上の他に、玄室内より人骨とは確認されてないが、5×30cm程の範囲で骨片が分布するのが検出されている。

3. まとめ

山畑66号墳は、古く棚田の形成時に墳丘はもとより石室も大部分を破壊され、基底部と2段

目の石組みを一部残すのみである。その存在はこれまでに全く知られておらず、新しく山畑66号墳として群に追加する。

調査の結果、石室の遺存状態は良くないが、玄室奥半部の床面についてはかなり残存していることが判明した。床面には敷石があって、土師器坩と須恵器蓋の2個が敷石上に置かれ、鉄釘10数本も出土した。これらより木棺の存在が知られる。山畑古墳群において木棺は石棺と併せて用いられる例が多く、木棺のみの埋葬は玄室の幅1.4 m以下の小型の石室に用いられる場合が多い。本例は、石室内に石棺材片のみられない木棺による複数埋葬から成る可能性を有し、土器型式や石室形態から7世紀初頭頃の築造と考えられる。山畑古墳群内では終末に近い時期の築造とみられ、墳丘が存在した頃には裾を接するように並んでいた19号墳とは密接な関係を有すると推定される。　（芋本隆裕）



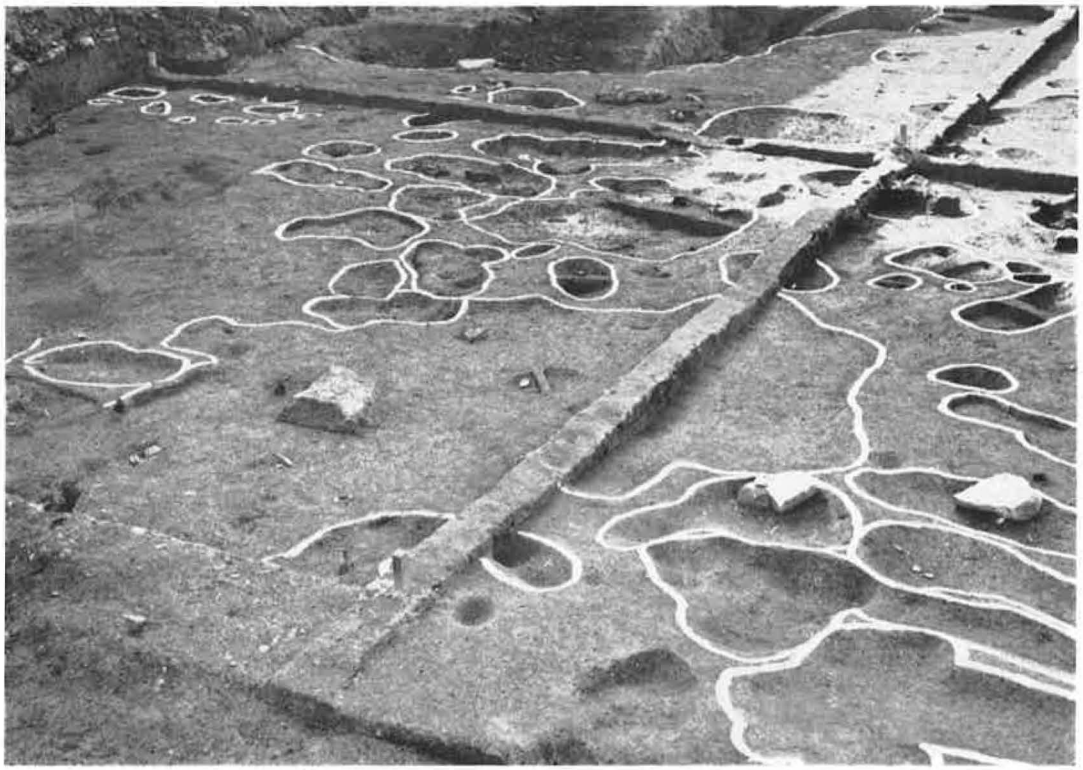
第22図　出土遺物

図　　版

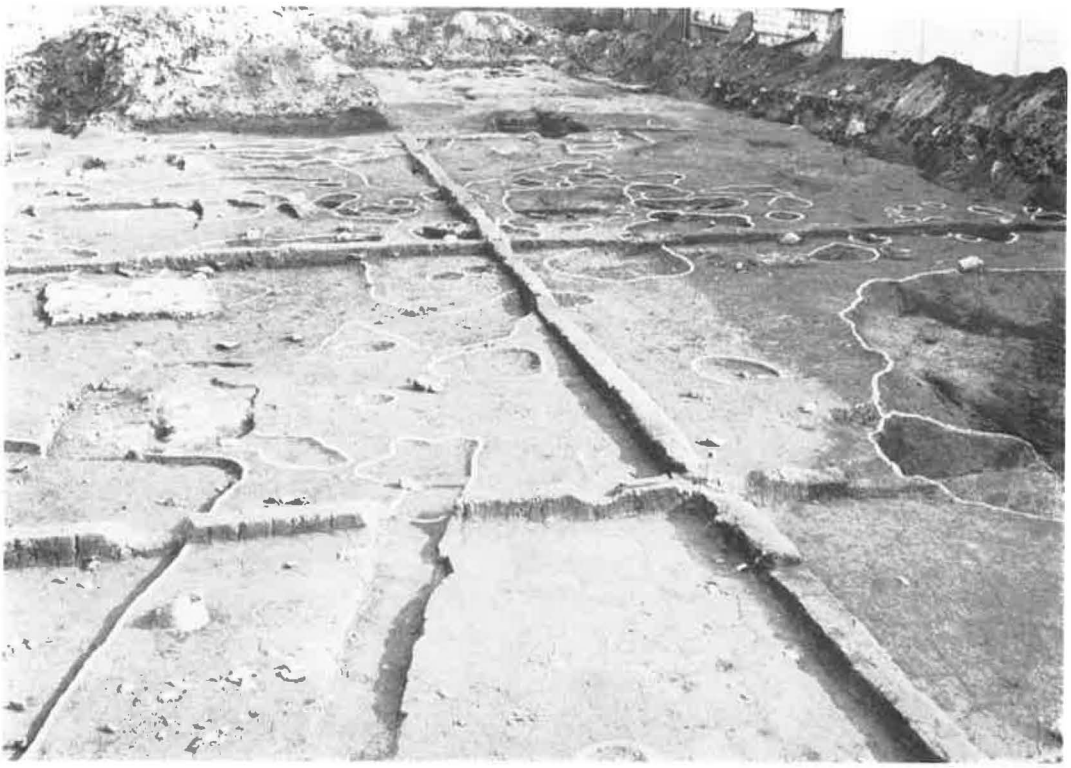
図版1　調査遺跡周辺航空写真

1．山畑66号墳　2．上六万寺遺跡　3．馬場川遺跡

図版2　馬場川遺跡縄文晩期遺構

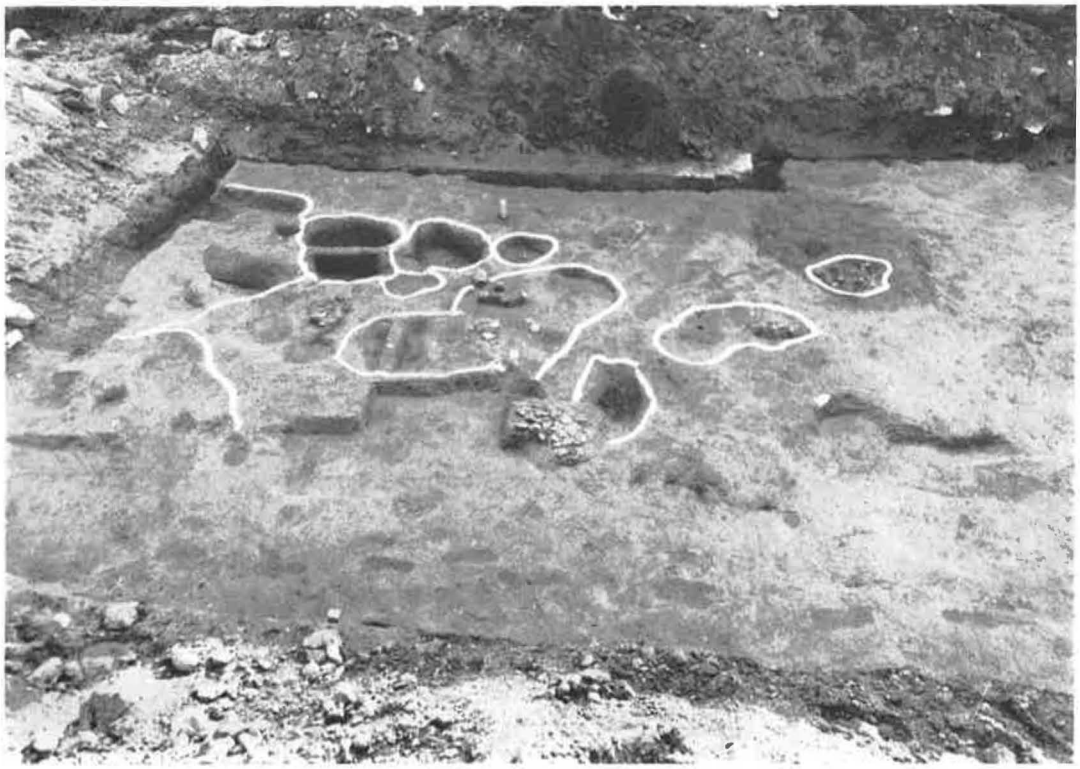


調査区中央部遺構（I－3～4地区 東より）

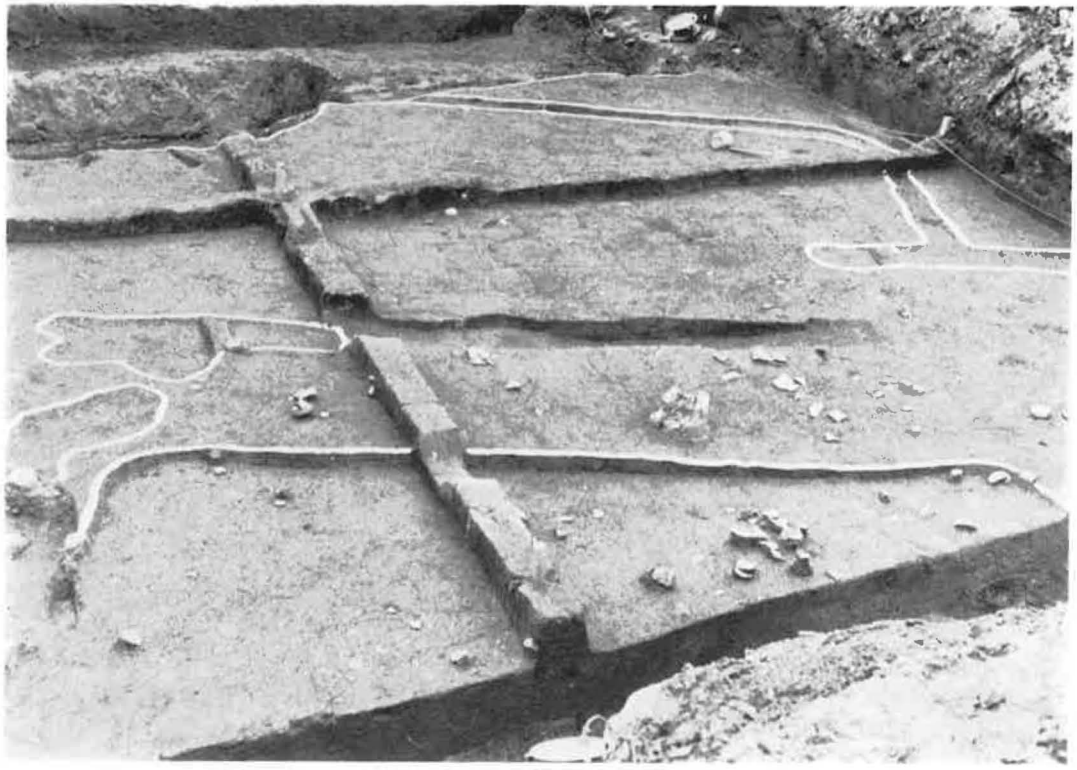


検出遺構全景（K－3地区 西端より）

図版3　馬場川遺跡縄文晩期遺構



調査区東端H－4地区の遺構（北より）



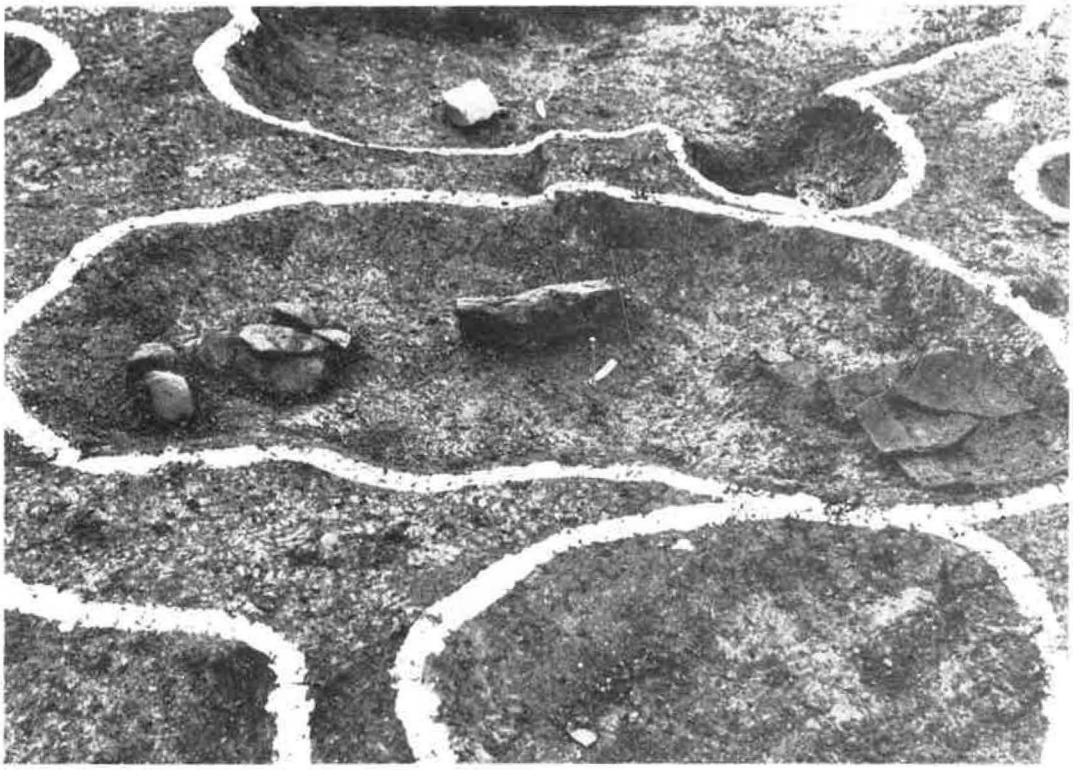
西端K－3地区の竪穴式住居跡（上部溝は弥生時代後期）北より

図版4　馬場川遺跡縄文土器出土状況

Ｉ－３地区土器出土状況（北東より）

Ｊ－３地区東端土器出土状況（西より）

シカの下顎骨検出状況（J－4地区）



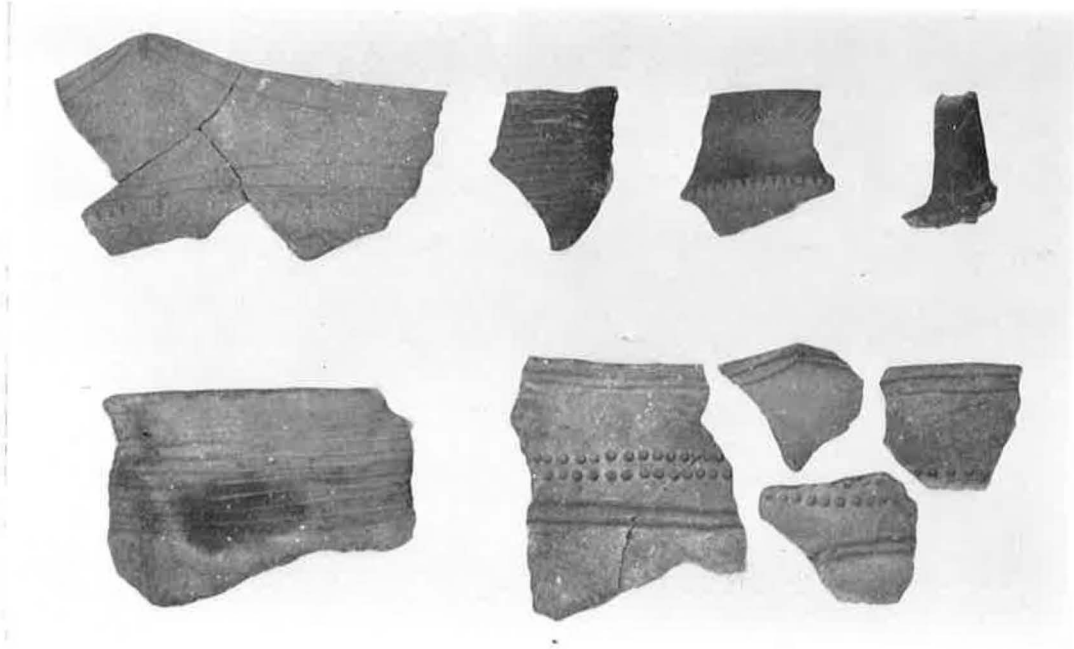
土壙検出状況（I－4地区－P39　中央はイノシシの骨）

図版6　馬場川遺跡弥生時代井戸状遺構

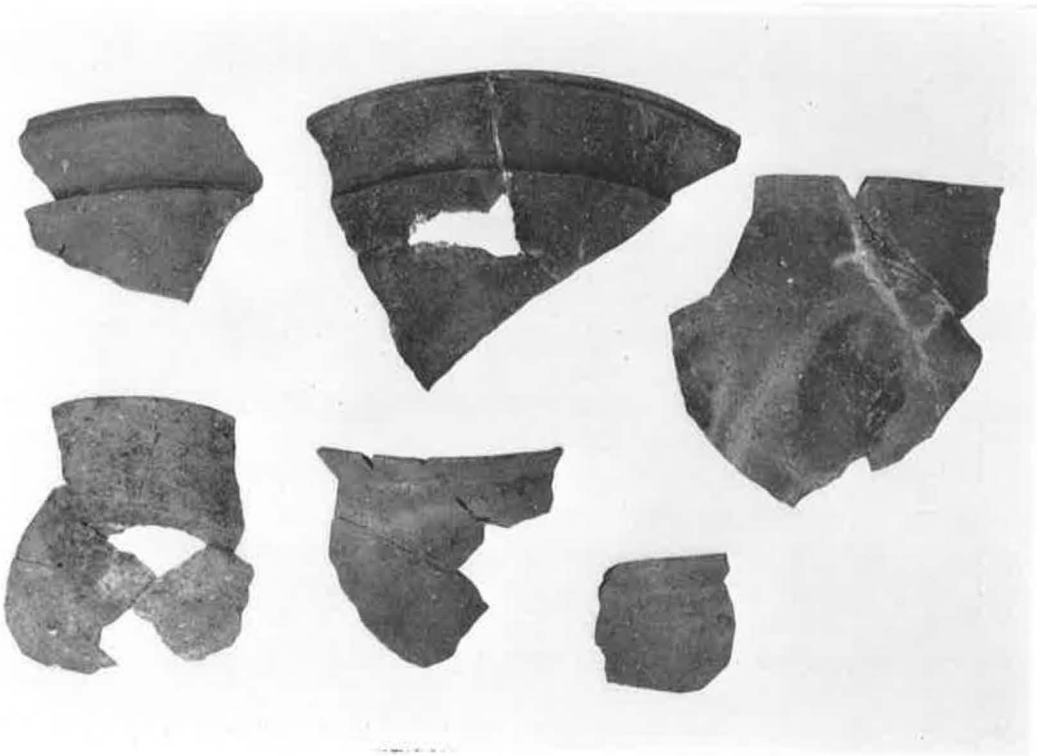
J－4地区検出の井戸状遺構

同　上（北より）

図版7　馬場川遺跡縄文土器

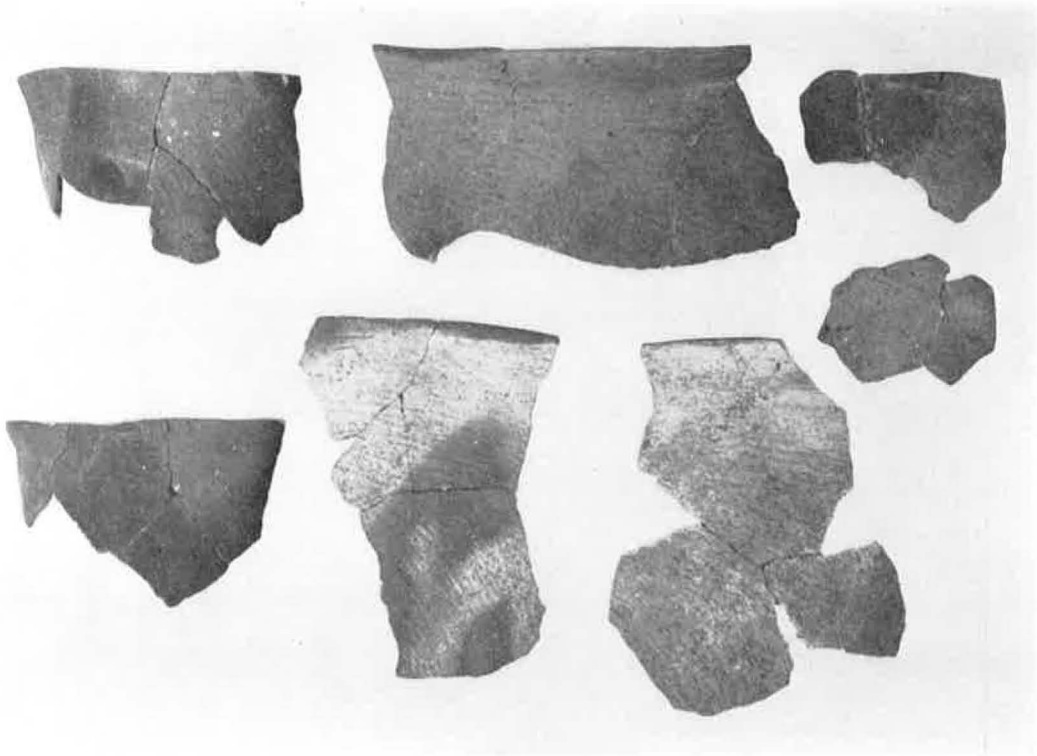


浅鉢・深鉢

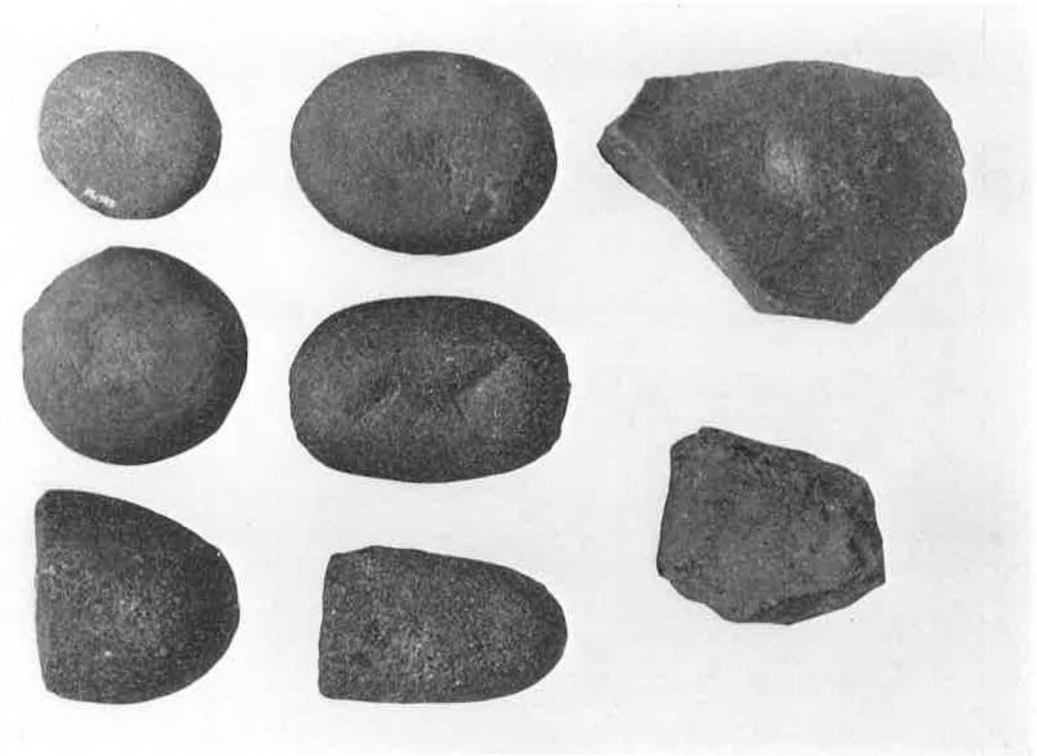


浅鉢・深鉢

図版8　馬場川遺跡縄文土器・石器

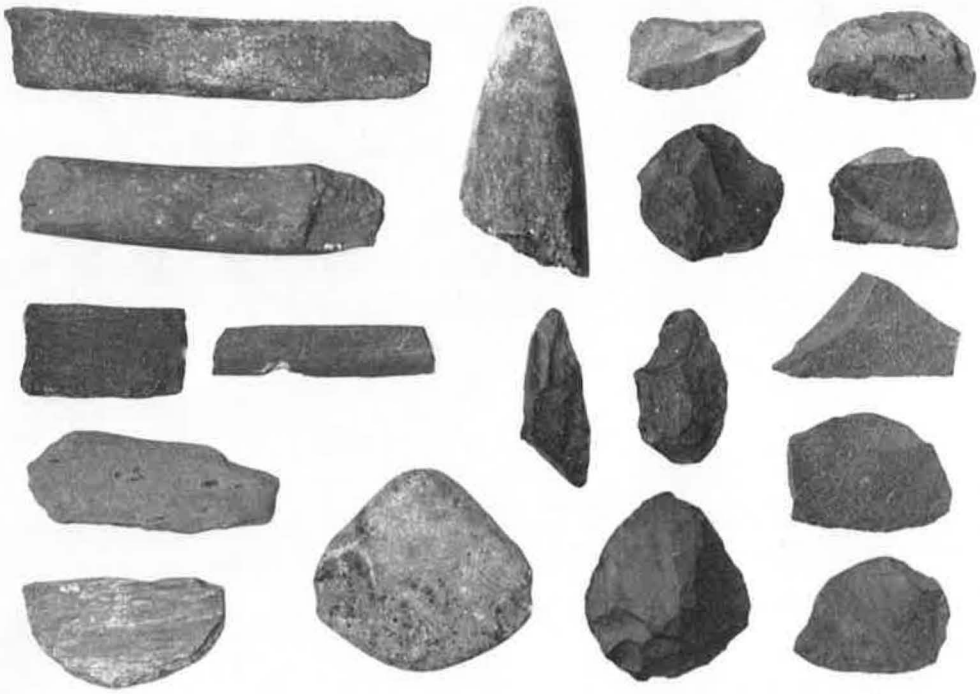


深　鉢　片



凹石・磨石・石皿片

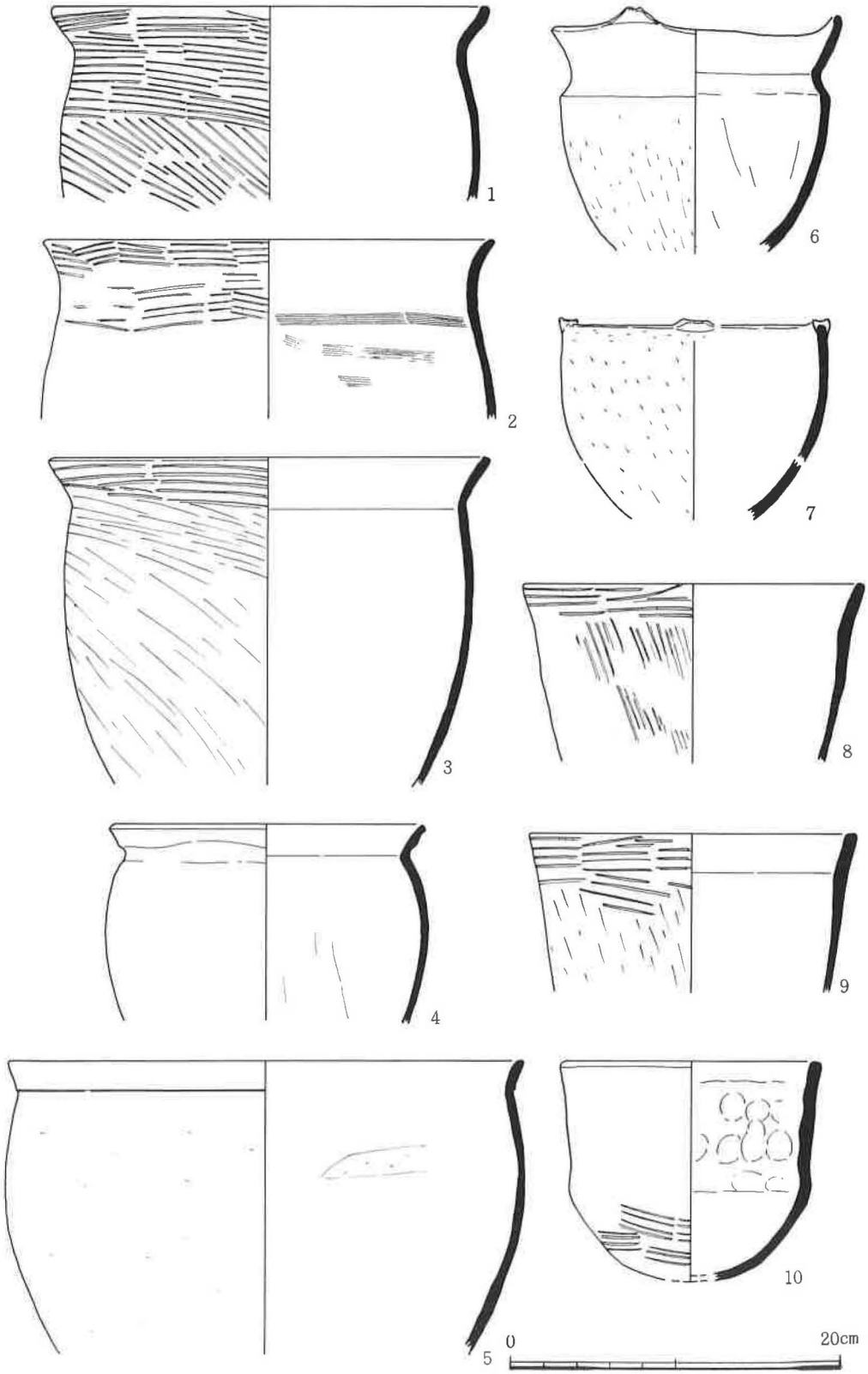
図版9　馬場川遺跡縄文時代石器



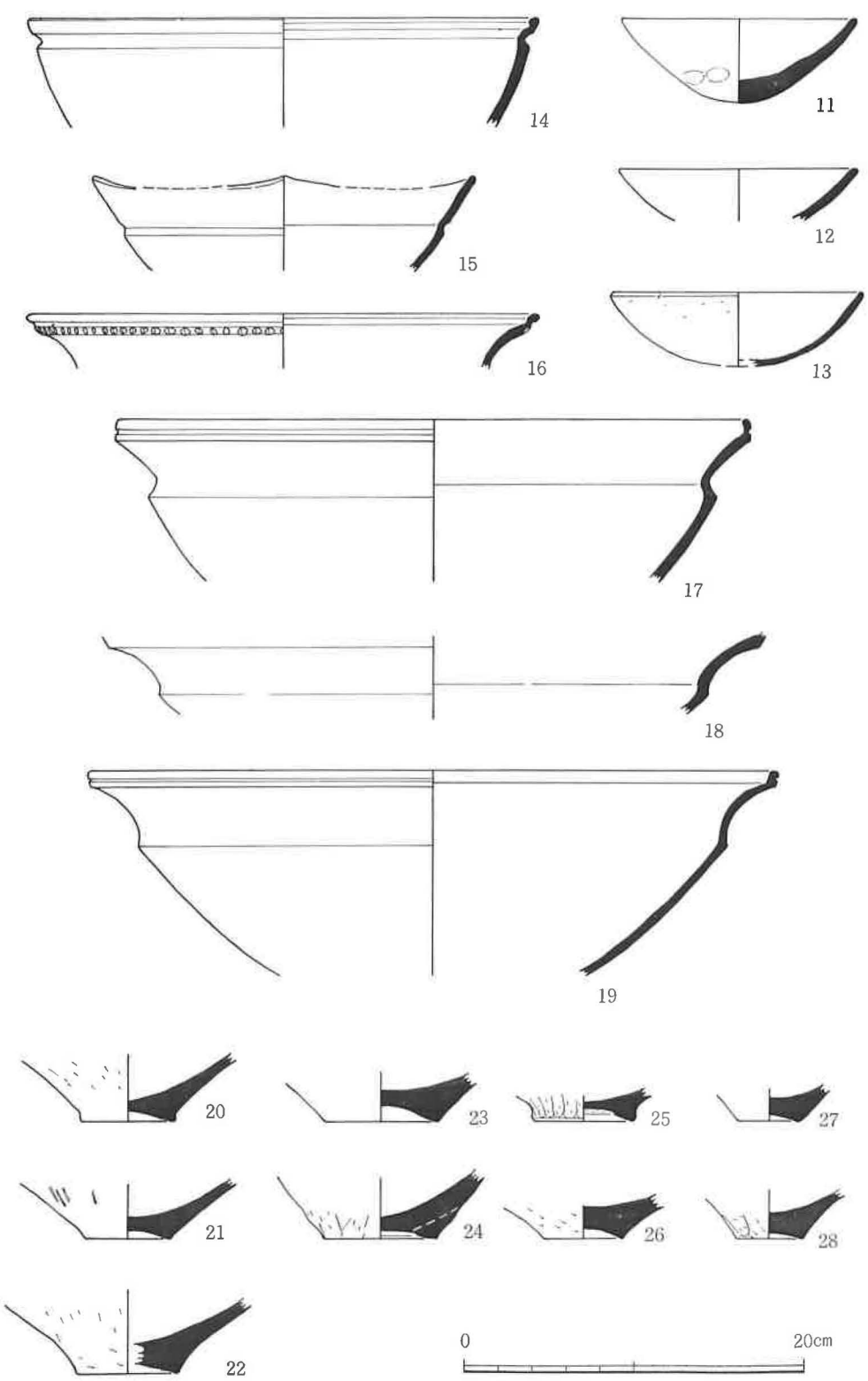
石刀・横刃型石器・石錘・調整石器他

石鏃・石棒片・黒曜石

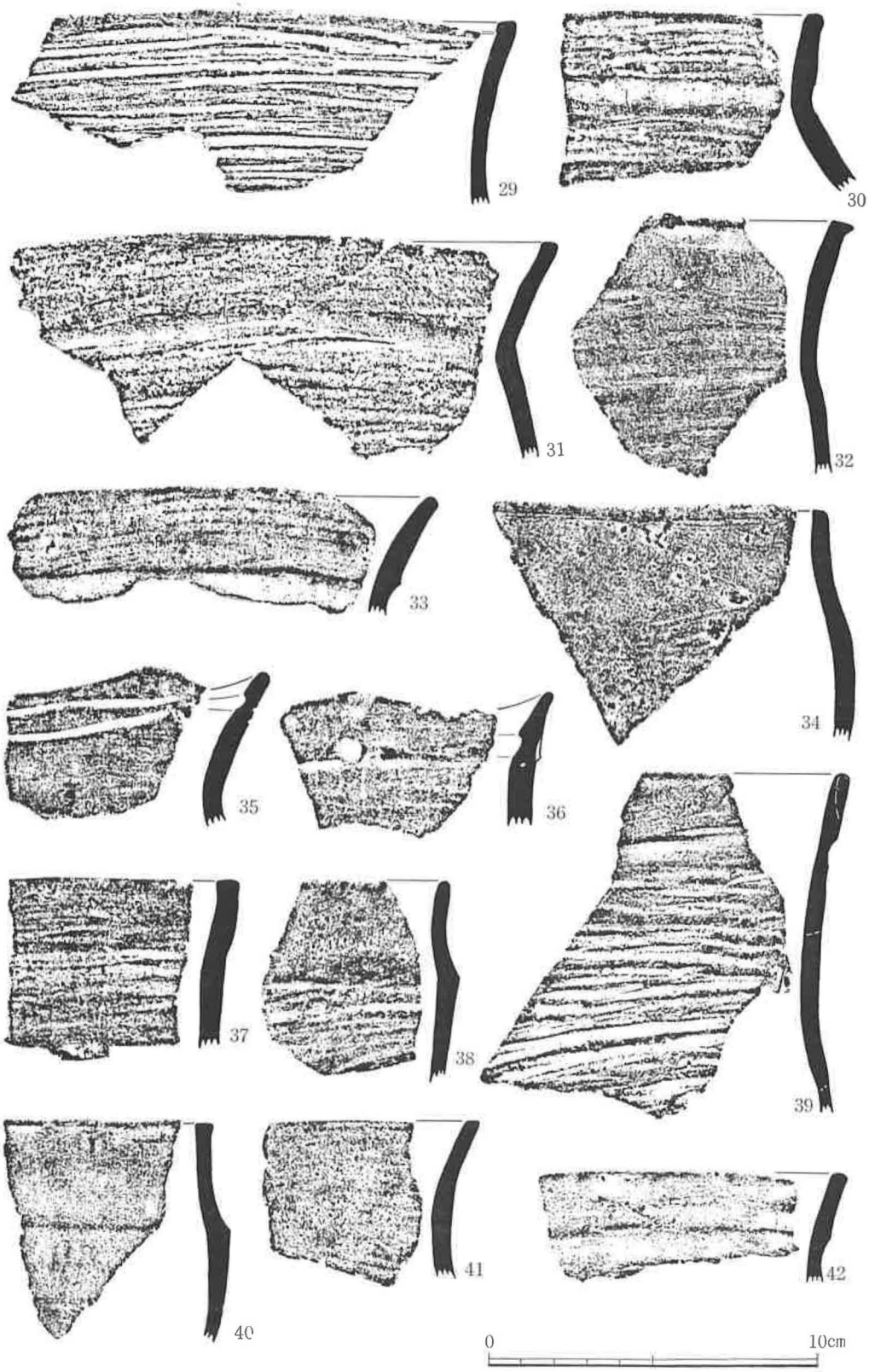
図版10　馬場川遺跡縄文土器1



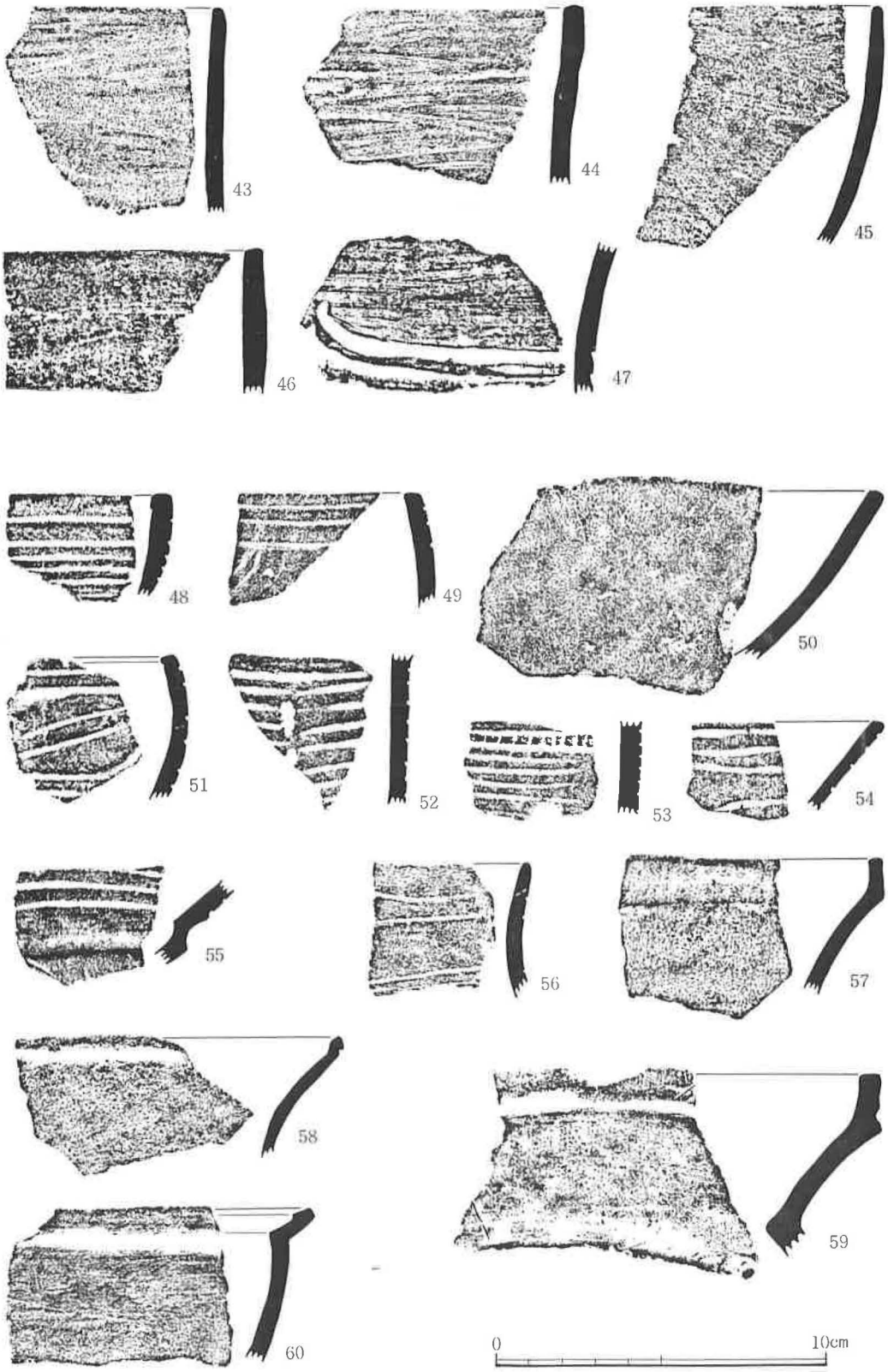
図版11　馬場川遺跡縄文土器2



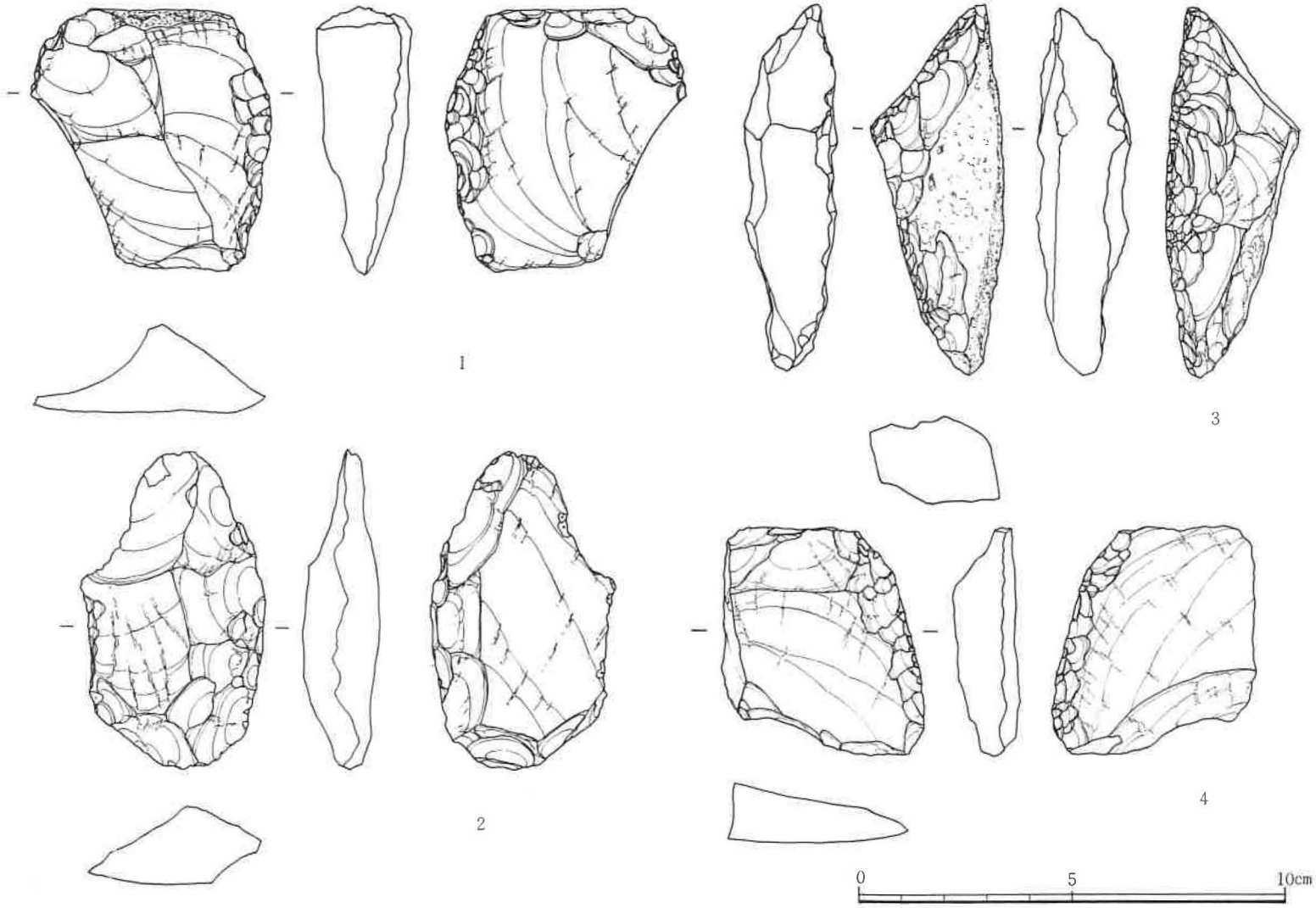
図版12　馬場川遺跡縄文土器3



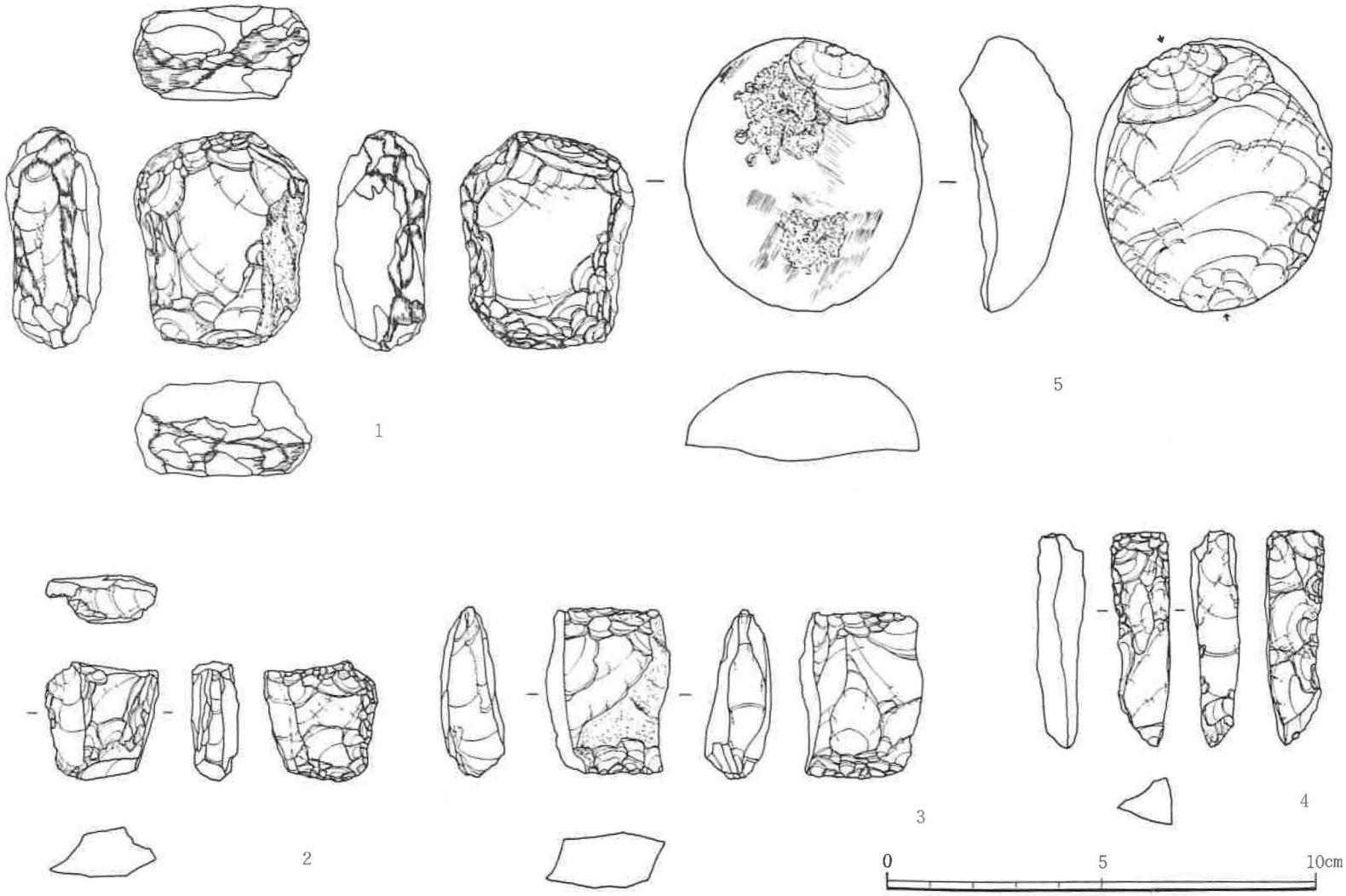
図版13　馬場川遺跡縄文土器4



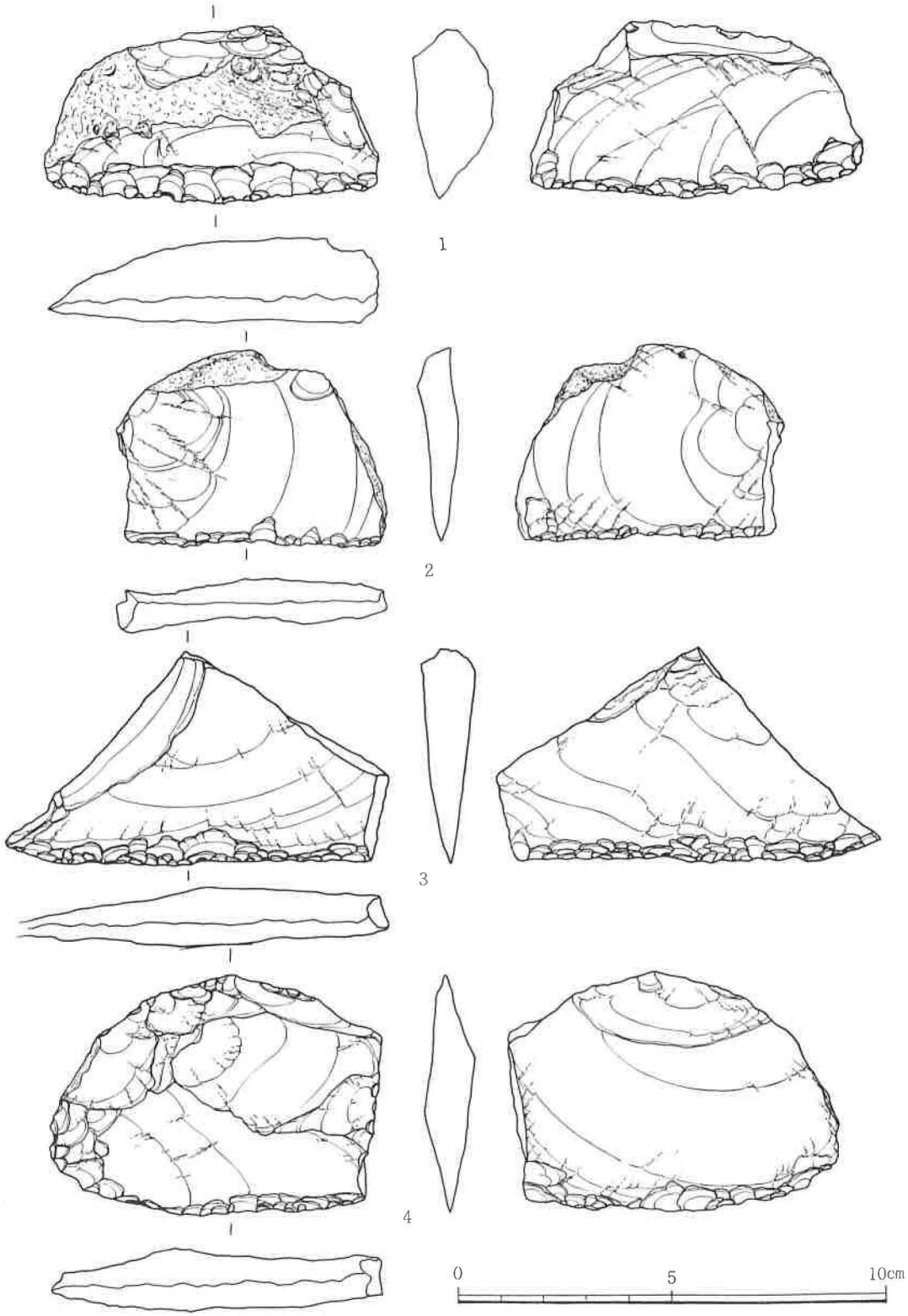
図版14　馬場川遺跡石器1



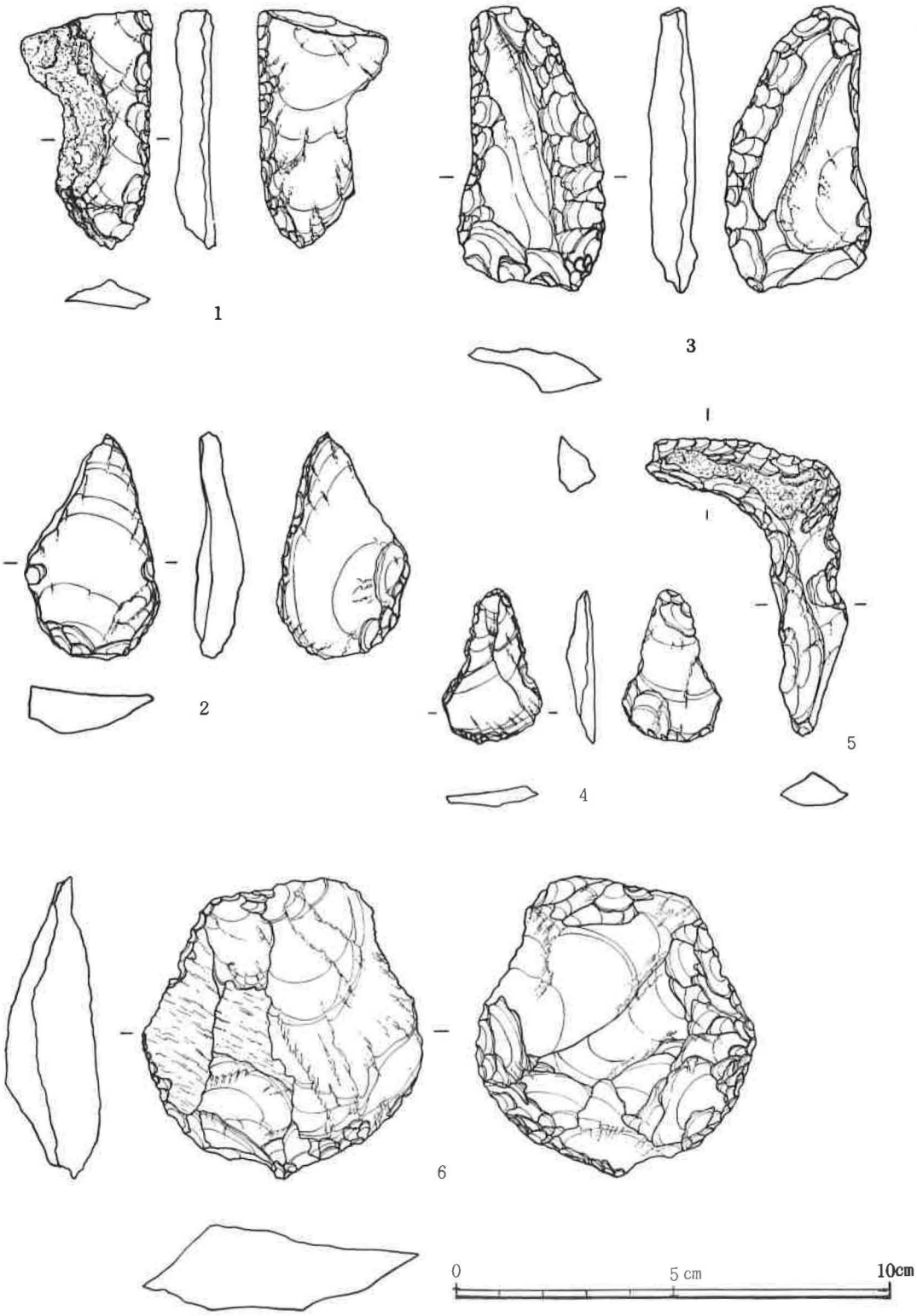
図版15　馬場川遺跡石器2



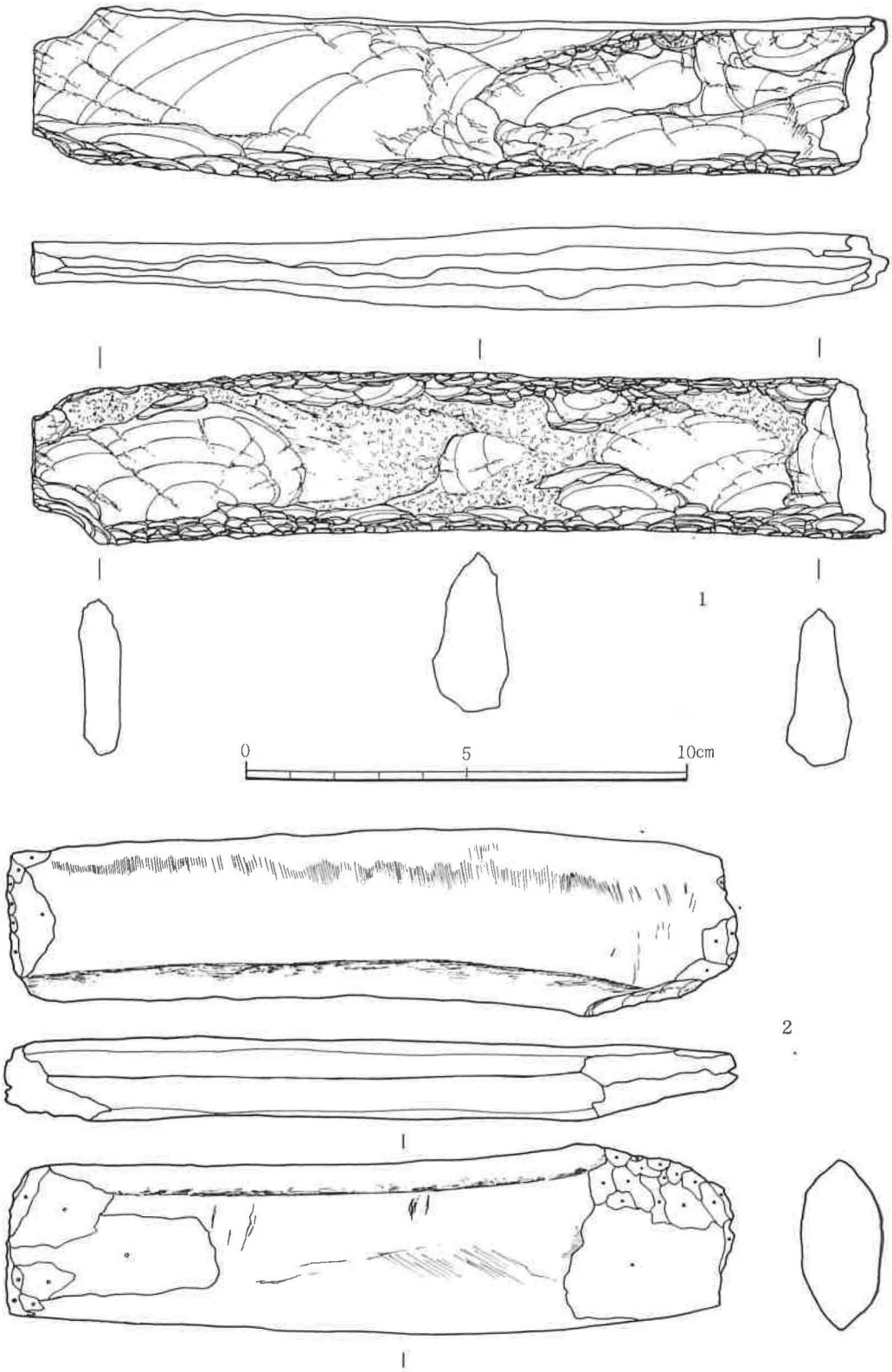
図版16　馬場川遺跡石器3



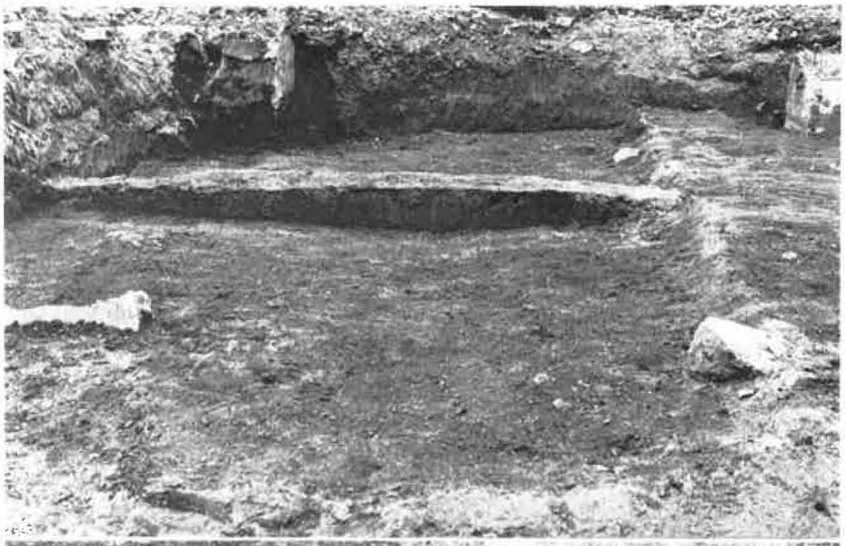
図版17　馬場川遺跡石器4



図版18　馬場川遺跡石器5



図版19　上六万寺遺跡遺構・遺物

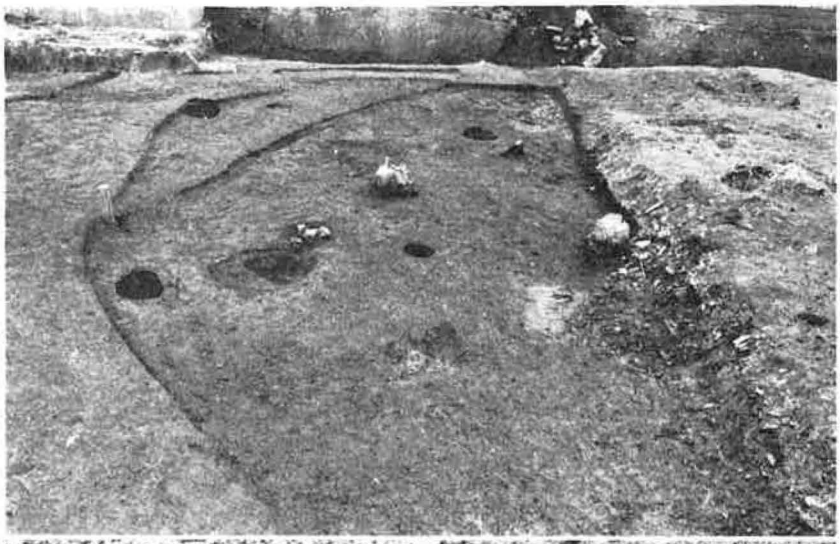


中世の溝

弥生土器出土状態

弥生土器出土状態

図版20　上六万寺遺跡遺構・遺物

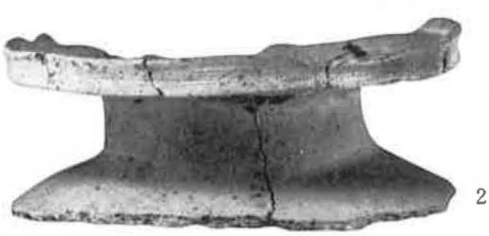


住　居　跡

住居跡内遺物出土状態

西　側　断　面

図版21　上六万寺遺跡遺物1


2

3

4

6

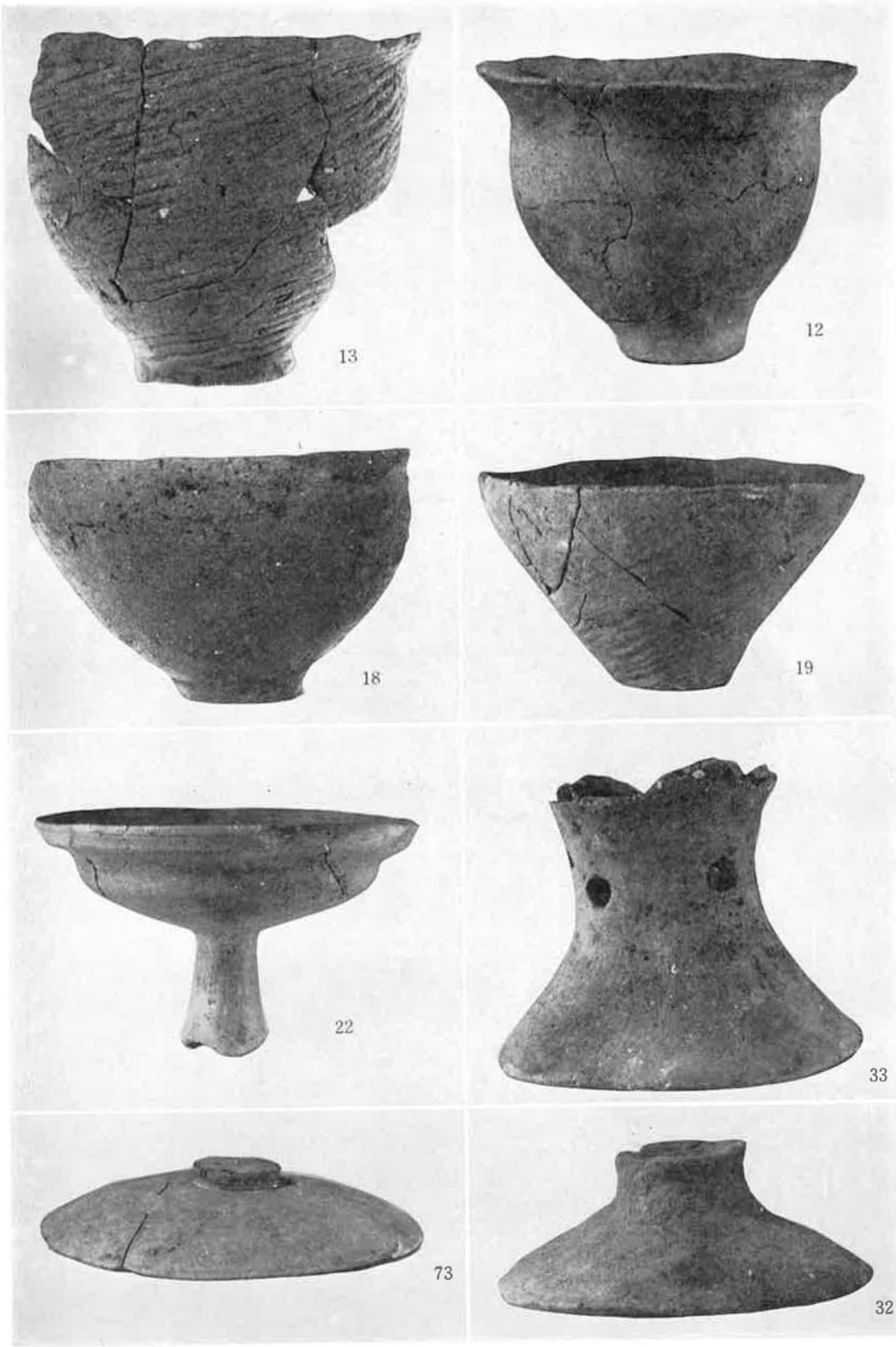
8

7

16

17

弥生土器　壺・鉢



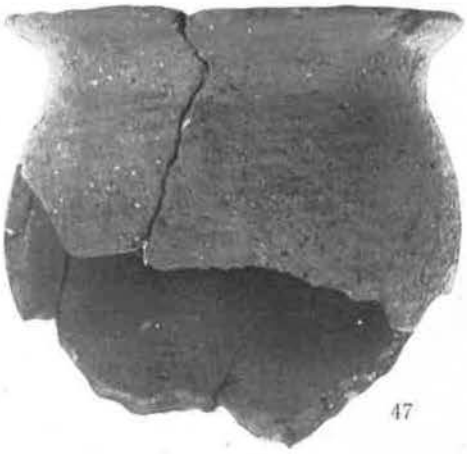
弥生土器　鉢・高杯・器台・甕用蓋・土師器杯蓋

38

37

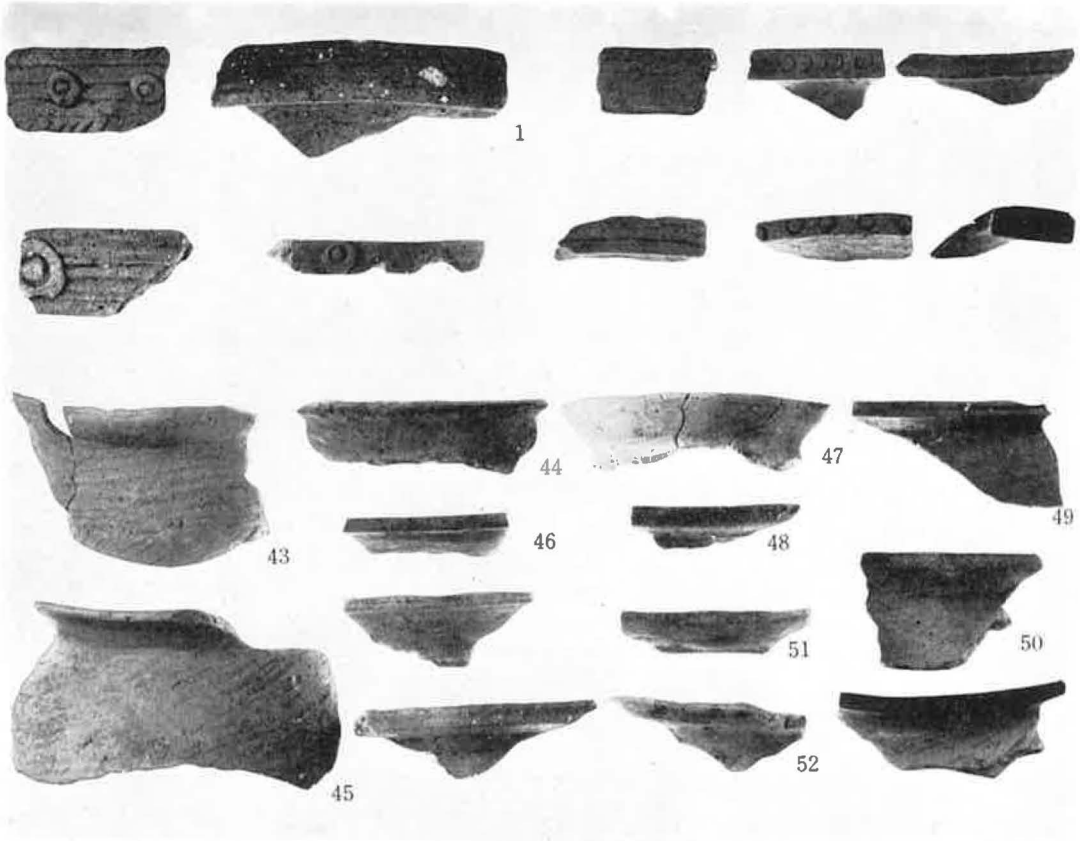
44

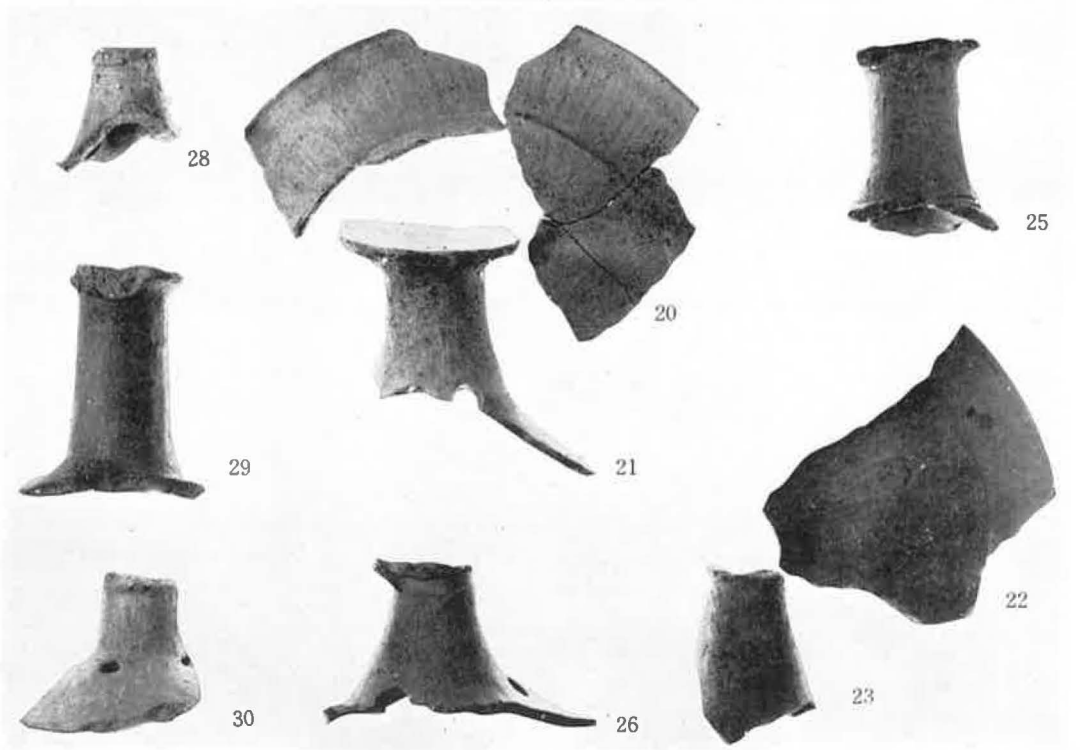
46


47

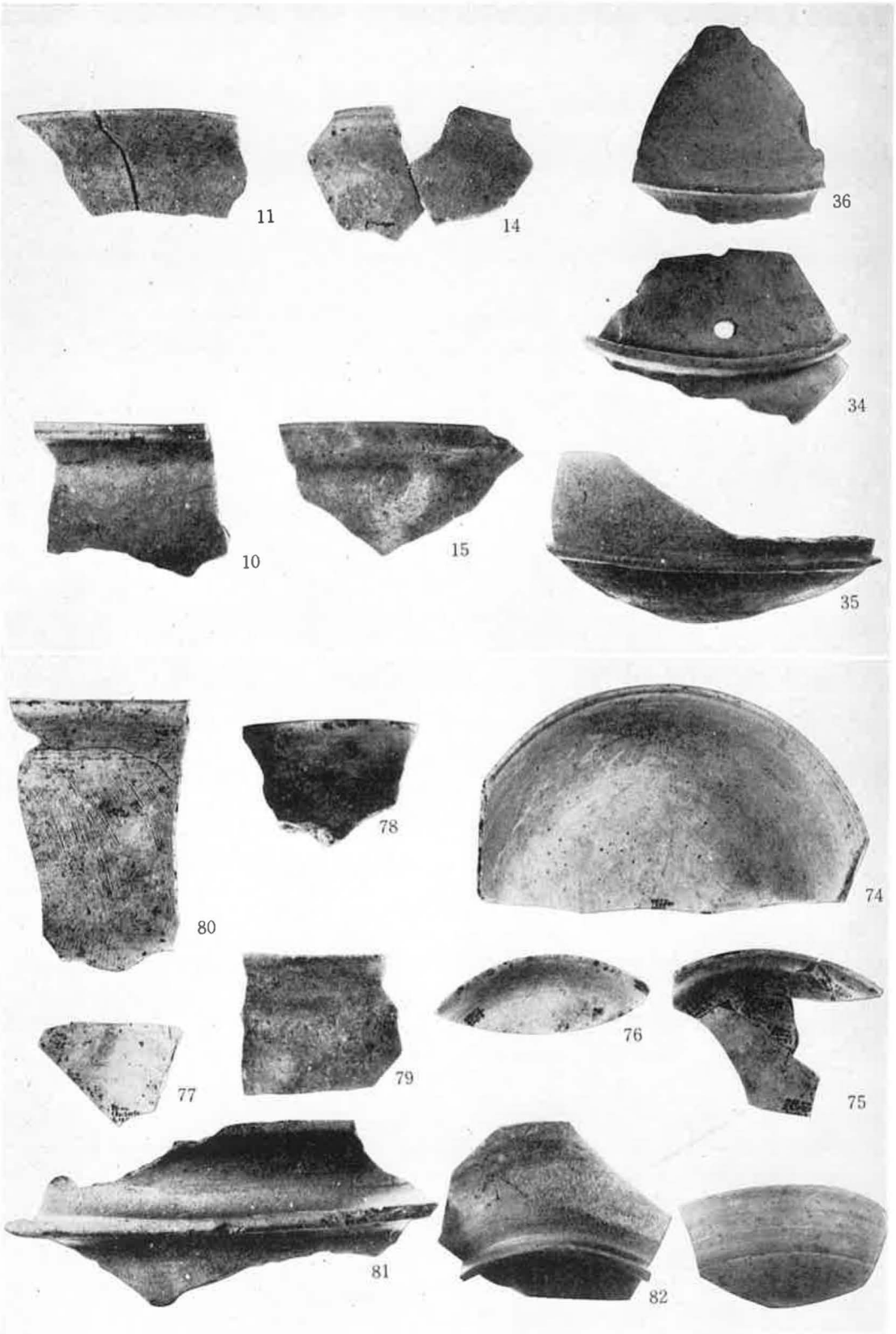
45

弥生土器　甕





（上）弥生土器　壺・甕　　（下）弥生土器　高杯



（上）弥生土器　鉢・手焙形土器　　（下）歴史時代の土師器・須恵器

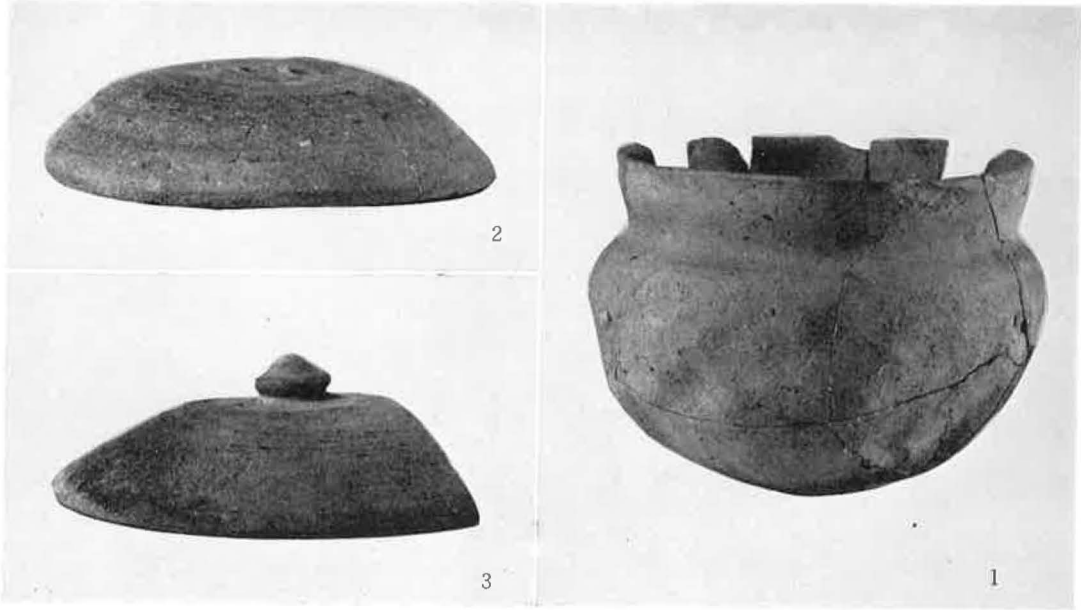
図版26　山畑66号墳石室

古　墳　全　景

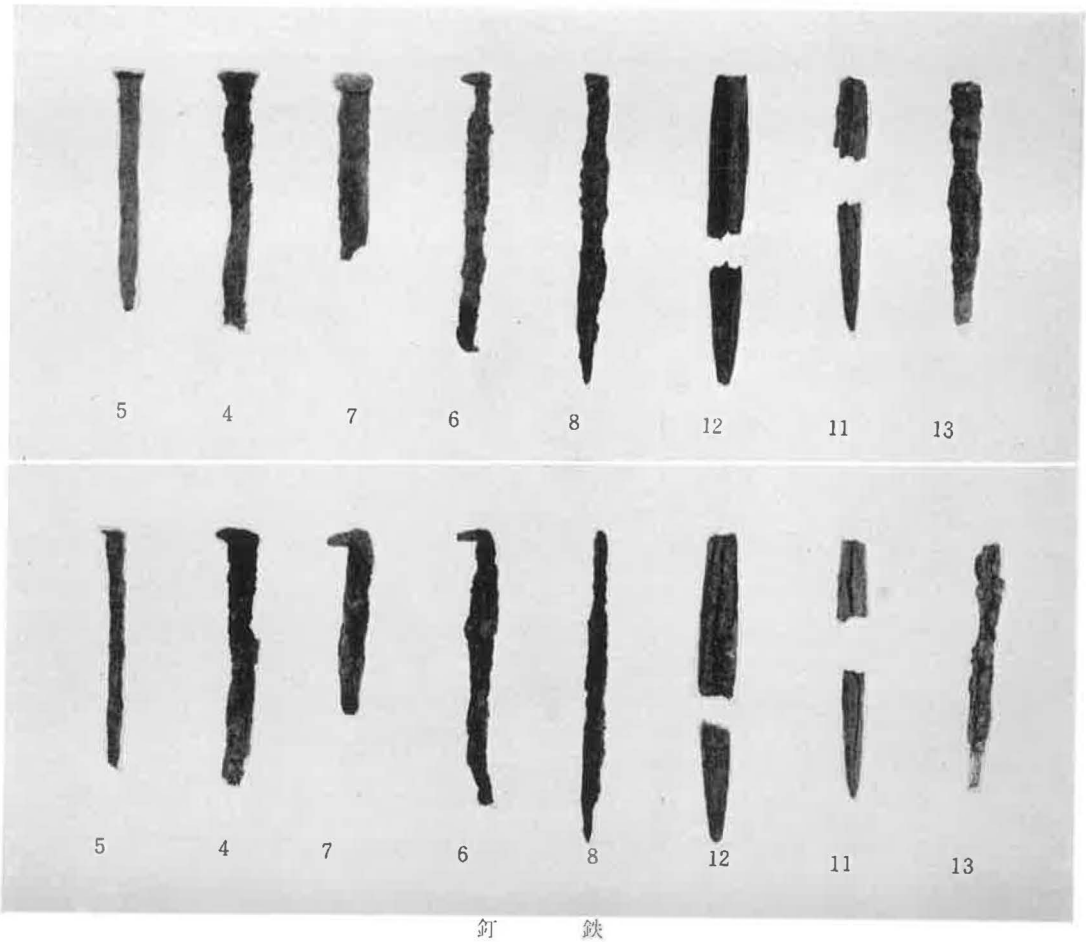
石　室　全　景

石室内床面の状況

図版27　山畑66号墳遺物



須恵器・土師器



釘　　鉄

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報　22
馬場川遺跡・上六万寺遺跡
山畑 66 号墳調査報告

発行日　昭和 56 年 3 月 31 日
発　行　東大阪市教育委員会
印刷所　中村朝日堂印刷所